第11回 全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞 発表

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第11回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇一七年九月二十四日日曜日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって厳正に行なわれました。作品ごとに選考委員から鋭い批評が発せられ、濃密な議論が交わされました。選考の結果、以下のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに発表させていただきます。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（賞金は寄付によるものです）および記念トロフィー、また今回は特に木内是壽氏の特別寄贈により、エミール・ガレの「アール・ヌーヴォー　朱紅ランプ」復刻作品を贈らせていただきます。また特別賞には賞状と賞金五万円・記念トロフィーを、河林満賞ならびに中上紀賞には賞状・賞金五万円と記念品を、また優秀賞には賞状と賞金三万円・記念メダルを贈らせていただきます。また選考委員のサイン本も贈呈いたします。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にも多数の方が御参加くださり、また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手で同人雑誌の優秀作品を選び、この賞を育てていっていただきたいと存じます。全国の同人雑誌諸氏の熱い支持を切にお願いする次第です。

この結果また優秀作はインターネットでも発表される予定です。どうぞ御覧いただけましたら幸いです。

なお、例年行われてきましたまほろば賞の授賞式および懇親会は、本年は休止とさせていただきます。なにとぞご容赦のほどお願い申し上げます。

第11回全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞

「シーランチの住宅」（「私人」90号）
江平完司

復刻作品
Emile Galle
朱紅ランプ
木内是壽氏寄贈

特別賞

「白く長い橋」（「カプリチオ」45号）
関谷雄孝

河林満賞

「最後の海軍航空兵」（「海峡」37号）
西山慶尚

読者賞

「百日の記」（「噛風」40号）
紺野夏子

中上紀賞

優秀賞

「暗い森」（「ザイン」20号）
こしばきこう

「サクラサクサク」（「星灯」3号）
たいらいさとし

まほろば賞賞金は、故蘭藍子氏、故原石寛氏、夏目火美子氏、木内是壽氏、今田真理子氏などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「安芸文学」「ぺん」「海」「狐火」「群系」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

芥川賞を凌ぐ同人誌おそるべし

三田誠広

みた　まさひろ
1948　大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに『いちご同盟』『空海』『親鸞』『聖徳太子』『偉大な罪人の生涯 続カラマーゾフの兄弟』など
日本文藝家協会副理事長
創作者団体協議会議長
著作権情報センター理事
日本点字図書館理事
武蔵野大学文学部教授

体力が必要なスポーツと違って、小説創作は年齢とともに奥が深くなり、達成の領域に迫っていく。今回の候補作のいくつかは、芥川賞の受賞作をしのぐばかりか、選考委員の近作をも凌駕するレベルに達していると感じられた。

「シーランチの住宅」（江平完司）はアメリカ西海岸に留学した建築志望の青年が、かなりクセのある芸術家肌の老建築家のもとで修行を重ねる話だ。建築をめぐる芸術小説的な展開もあり、日常性を超えた哲学めいた発想もあって、書き手の志の高さに驚かされる。哲学といっても熟練の書き手の筆に生硬さはなく、脇役のウクライナ人女性の存在感が通俗性に通じる魅力を発散させていて、エンターテインメントとしても楽しめる。「純文学にして通俗小説」というかつての新感覚派の理念が思い起こされた。

「白く長い橋」（関谷雄孝）にも強く惹かれた。長く医療に携わった主人公が晩年に到って、日常性を超えた領域に近づいていく。そういう導入部に続いて、話は一気に終戦直後に回帰して、木炭バスに乗って白く長い橋を渡り、茨城県の僻地に薬を届ける闇商売の話になる。いかにも怪しげな神がかりの人物が登場し、はじめは警戒し軽侮もしていた主人公が、しだいにこの人物の奇妙な存在感にとらわれていく。インチキくさく感じられていた神がかりの人物が、国家権力を相手に自身の予知能力の正しさを貫き通すくだりは感動的だ。リアリズムの文体で、リアルな世界の果てに一歩踏み出していく作者の試みは、年輩者の達成というよりも、若々しい前衛的な挑戦と感じられる。文学というものの凄味がここにある。

「最後の海軍航空兵」（西山慶尚）も感動的だ。特攻隊をめぐる随筆ふうの展開で、兄を戦争で亡くした主人公が、航空兵だった老人と旅をする話だが、穏やかな会話の中に、突如として、戦時中の美しいロマンスが語られる。あまりにもピュアなエピソードが、淡々とした老人たちの会話の中を、ひらめくようによぎっていくさまは、これまた文学というものの底知れぬ深さを感じさせる。商業雑誌では絶えて見ることのできなくなった本物の文学がここにあると感じられた。ここまでの三作は甲乙がつけがたく、わたし自身、選考に苦労をしたし、選考会もやや紛糾した。

「百日の記」（紺野夏子）は素材の魅力に対して、展開に難があって、何とも惜しいという感じがした。朝鮮戦争の時代の脱走黒人兵にまつわるスリリングなエピソードはよく考え抜かれていて、切なさと怪しい高揚が伝わってくる。ただその時代から年月を経た時点で、作中のヒロインにあたる伯母の過去について、語り手の女性が探索し、謎解きをするという展開が、本来のストーリーのもつ魅力を半減させている。すべてが伝聞と古びた日記を素材として語られるので、描かれた情景が間接的なものとなってしまい、なまなましい愛欲と暴力性を伴ったストーリーに厚いベールをかぶせてしまった。最後にとってつけたように出てくる愛の結晶ともいえる従兄弟にあたる黒人男性をもっと早い段階で登場させ、若い男のなまなましい肉体の魅力を見せておいてから過去に遡っていくといった仕掛けがあれば、過去のエピソードにも臨場感が出てきたのではないかと思われる。

「暗い森」（こしばきこう）は瑞々しい感受性が感じられる文体で、北海道の自然と野生動物の生態が語られる。そこまでは魅力的なのだが、登場人物たちの人間関係があまりにも狭い世界に収束していて、図式が空転していると感じられた。野生動物の命と、実験動物の命が対比されているのだが、北海道の人はサケやホッケを食べないのかと思ってシンパシーをもてなかった。観念的な主張や作り物めいた人間関係を放棄して、もっとのびのびと自然を描けばいいのではないだろうか。

「サクラサクサク」（たいらいさとし）は若い書き手の現代ふうの作品で、働かなくても生きていける金持子弟の引きこもりの男たちを相手に、詐偽まがいの仕事をしている主人公の鬱屈した日常を描いている。その詐偽の手口が詳細に語られているところがおもしろく、現代社会に対する批評性も感じられて、わるくない作品だと思うのだが、加害者と被害者の共通点として、中東で死んだ自衛隊員の兄をもつという設定が安易で、作品のインパクトを弱めている。高齢の書き手の渾身の一撃と比べれば、いかにも浅く、小手先だけで書いているという印象を否めない。同人誌おそるべし。若い書き手はどうがんばっても年輩の書き手には及ばない。甲子園の球児になったつもりで、商業雑誌の新人賞を目指した方がいいかもしれない。

どうしても書きたかった作品

小浜清志

こはま　きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

選考会に向かうため電車を乗り継ぎながら何故小説を書こうと思ったのかを考えていた。僕の場合はあれこれと手を出してみたが、どれ一つとして芽が出ず、背水の陣を敷いたつもりで作家を志した。四、五年努力すれば新人賞位はとれるだろうとタカをくくっていた。二十七歳の時だった。書くことには自信もあったし上京して波乱の生活を送っていたから題材は無数にあると錯覚していたことに気付いたのは十回目の投稿が一次予選も通過しなかった時だった。すでに五年の歳月が過ぎていたし、気力も失せかけていたが、故河林満との出会いがぼくの生活に彩りを与えてくれた。河林の紹介する作家志望者との飲み会も刺激的だった。それ迄は、ひたすら独りで読んで書くという生活だったが、仲間との触れ合いで自分の立ち位置も次第に見えてきたし、作品に対する姿勢も変化していった。そしてやっとそこで、自分が書くべき作品と出会ったのだと思う。今回六編の作品を読んでいて、どうしても書きたかったであろう作品と出会えたのは感動であった。

「白く長い橋」は五十二年続けてきた病院を閉じた主人公が医学部の学生として生きていた戦後二年目に体験した事柄を回顧しながら科学では解明できないであろうシャーマンの世界を描いた作品である。月に三回、東京から鹿島神宮門前町までの闇の薬を運ぶアルバイトを通して見えてくる稲荷さまという人物の輪郭が徐々に明らかになっていく。胡散臭い占いで金をまきあげる輩らだと軽蔑していたが、戦争末期に戦死された息子を占った結果生きているとしたことで逮捕される。戦争公報に反するお告げであるから、治安維持法の網がかけられたのである。しかし、逮捕した側も非さえ認めればすぐに釈放したであろうが彼はじぶんのお告げを変えようとはしなかった。それで隆盛を極めていた稲荷神社は崩壊していく。拷問に耐えてもたった一人でお告げを守ろうとした稲荷さまの生き方に読み手も惹かれていく。そして、何年か後にあのお告げ通り戦死したはずの男が生きて帰ったと風の便りで聞く。医者という科学の目を持った主人公が稲荷さまを描いていく過程は上質の文学の香りがした名作だった。

「最後の海軍航空兵」――この作品もまた作者がどうしても書き残したかったという情熱が伝わってきた。

杉田慎司さんに初めて会ったのは八年前。主人公は戦死した兄と同じ予科練出身である杉田さんと兄の墓参りに付き添うことになって付き合いが始まり、杉田さんの予科練時代の体験談を色々と聞く。しかし、主人公は杉田さんの口から家族の話題がまったく出て来ないことに疑問を抱き「奥さんは元気ですか」とさぐりを入れるがあっさりと、八年前に亡くなっていたと告げられる。そして奥さんとの戦時中の出会い、戦後になっての結婚のいきさつの話があり、四年前には娘をも亡くしていたことを知らされる。しかし、奥さんや娘の死は完結した死であるが、戦友たちの死はまだ完結しておらず未完の死だという杉田さんは、死ぬまで慰霊の行動を続けるという。その言葉を作者もまた共有しているのだろう。

「サクラサクサク」は大変に魅力のある作品であった。簡単なデータ入力のアルバイトという募集であるが、その裏側には人間の欲望と策略が跋扈（ばっこ）しているという闇の深さを作者は見ている側にとどまってしまった。その言葉を作者もまた共有しているのだろう。その闇を自分の中に見出し手で触れることが出来たら怪物のような作品になっていただろう。若さも筆力もある作者であるから期待大である。

「百日の記」――本家の裏山の洞穴から人骨が出たと警察から連絡があった。アフリカ系の人骨で死後五十年は経過しているという。本家を継ぐことになったアキ子さんに長年つかえてきたミネさんとの会話を思い出すとから物語が動き出す。アキ子さんのノートから脱走兵であったアレックスとの百日間の出来事が明らかになり、主人公はミネから全貌を聞き出すためにせっせと老人ホームへ足を運ぶ。そしてアレックスとアキ子の子がハワイ在住のいとこのケント、カナエであると解明される。作者は読者の創造力を妨げてはならないのではないかと感じた。アキ子のノートも結末も、読者にとってはマイナスであった。

「暗い森」――製薬会社に勤めていた父が突然退職し、山岳カメラマンとしての初仕事で死ぬ。芝村庸一は父と同じ道を辿るべき薬学部にいたが熊谷冴子との出会いがきっかけで半年前に休学し祖父の山小屋を手伝うべき妹の咲を連れていく。冴子はかつて父の元で働いていたが、研究所の動物虐待に耐えられず退職し動物救護センターの手伝いをしながら医薬関係のルポライターもしている。庸一と冴子の恋愛に発展しそうな雰囲気を持ったまま山での出来事が色々と描かれる。全体的にリアリティーが薄すぎる。人物の配置も冴子の退職、庸一の退学も都合のよい進み方をしている。言葉というオールを必死に漕いでいるのだが、な

かなか前へ進めない。逆にそこに何か活路があるのかもしれないが、私にはそのことがうまく呑み込めなかった。

「シーランチの住宅」は受賞作になった作品らしく、登場人物それぞれに魅力があり、バッドという建築家の重層な精神構造と建築を芸術まで高めようとする姿勢に惹かれる主人公も、立体的に描かれている。サンフランシスコという舞台も作品の奥行きに彩りを与えている。これは青春の記念として作者がどうしても書きたかったのだろう。

なかがみ　のり

1971　東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99『イラワジの赤い花 ミャンマーの旅』（集英社）を上梓
同年『彼女のプレンカ』（集英社）ですばる文学賞受賞
『悪霊』（毎日新聞社）『いつか物語になるまで』（晶文社）『夢の船旅―父中上健次と熊野―』（河出書房新社）『アジア熱』（大田出版）『シャーマンが歌う夜』『水の宴』（集英社）『海の宮』（新潮社）『熊野物語』（平凡社）など著作多数

一瞬の輝きの果てに

中上　紀

今回の候補作もそれぞれが素晴らしく、読むこと自体が至福だった。ほとんどが何らかの形で「戦争」に関わる小説だったのも興味深い。時代は地続きであること、たくさんの悲しみや苦しみの果てに、私たちは生まれ、様々なつながりの中で生きているのだという事実を、聞こえてくる無数の過去の声たちが、これでもかと突きつけてくる。

特に圧倒された主な作品について記したいと思う。

もっとも引き込まれたのは「百日の記」である。ミネさんという、百二歳の女性が、語り部のように、過去を歌う。譲り受けた百年の歴史を持つ鼎家の本家の敷地から人骨が出てきたことを機に、主人公しおりは、亡き伯母あき子の日記「百日の記」のヒントを、介護施設に入所している、鼎家のかつての使用人ミネさんに求めるのであるが、そこで語られるのは、朝鮮戦争の頃に伯母がかくまった、アレックスという黒人の脱走兵のことだった。

鼎家には「洞穴から出てきたもんは大切にするべし」という言い伝えが伝わっており、洞窟は先祖代々守られそして祀られてきた場所だった。洞穴に隠れ住んでいた傷つき弱った異国の男は、鼎家を継ぐことを受け入れたあき子の目に、無自覚的にまるで神のごとく映ったのかもしれない。しかし、かくまうという、下手をすると自らの命さえ失いかねない自身の行動は、重々しい抑圧の下でもがく一人の女を、目覚めさせることになる。彼女は世話をするために

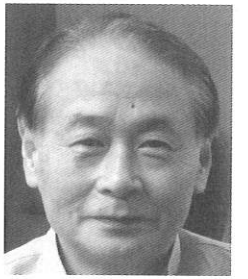
アレックスを蔵に入れたが、そこも、かつて流行り病にかかった者が入る座敷牢だった。傷ついた黒い膚と謎めいた心から絞りだされるうめき声と、あき子がずっと閉じ込めていた女としての叫び声が重なっていく。読者は、その二つの声を聞きながら、一気にエンディングへと読み進むしかないつくりになっている。

ふたりがどうなるのか、ある時点から容易に想像が出来る。だが、問題はそこではない。最後にあき子の息子らしい混血の男が家を借りに来るなど、話が出来すぎているのではないかとも思うが、そこもことさら追求するべき部分ではない。なぜなら、アレックスの黒い膚に包まれた、無駄な部分の一切ない肉体の醸し出す匂いが、リアルに迫ってきていた。のちに敗血症になるほど不衛生だった膚が発する、醜悪なしかし生き生きとした匂いが、何を意味しているのか。アレックスはまさに爆弾だった。あき子にとって、いや、私たちにとって。そんなことを考えさせられると同時に、過去から続くいま、そして明日への道に明るい光を照らしだす物語の行方を思った。

重く切実なテーマを扱っていながらも、何よりも強く輝くひとときの喜びに心を奪われたのが「最後の海軍航空兵」である。切々と語られる戦争の記憶は、あくまでも小説であるが、同時におそらく多くの人が似たような体験をしたはずの「事実」であり、紛れもない普遍性を抱えている。死に行く航空兵がふと出会った女性に、自分を覚えていてほしいと、写真を渡す。もし、明日死ぬのであれば、ほんの瞬きのような瞬間の触れ合いにさえ望みを託したい。どんな国のどんな人でも、そう思うはずだが、戦争の時代、それは「もし」という仮定ではなく、現実としてそこここで繰り広げられた光景であった。

「シーランチの住宅」は作者の体験的な小説だと思う。幸運にも私自身主人公のようにアメリカで大学生活を送り、美術学科の生徒として制作物の仕上げに追われたりといったことを経験している。もっとも、小説の舞台は一ドルがまだ三百六十円の時代であった。イコール「戦争」の記憶も新しい時代だということになるが、他の作品と異なる光を放つのは、日本人の「私」の建築の「師」バッドが若い頃属していたのはアメリカ軍であり、ドイツの町を爆撃する立場だったことである。バッドは、誤って病院を爆撃してしまったことを悔み、償うために素晴らしい空間をつくる建築家になった背景を持つが、彼が乗っていたのが仮にB29であり、爆撃したのが東京の病院であっても、おかしくはない。攻撃される側が、別の場所では攻撃する側であるのが戦争だという事実に、本作はさりげなく切り込んでいる。バッドは、建築家として人生の先輩として感動的な手紙を残してこの世を去る。長生きしろと言い残して。それを、私たちへのメッセージだと受け取った。

「白く長い橋」の「橋」は、三途の川にかかる橋のようだ。高齢のために医院を閉めた「私」は、敗戦時薬の行商をした若き自分を思い出す。読んでいる間、頭の中で絶え間なく響く「玉音放送」の割れた音を、止めることが出来なかった。それは、信じていたものがすべて崩れ落ちる瞬間でもあった。誰もが、向こう側にある、生きることを許されるのかどうかもわからない未知の世界に続く橋の上に、否が応でも一歩を踏み出すしかなかった。そうしてはじめた薬の行商の際、「私」が出会ったのは「稲荷さま」と呼ばれる、類まれな予知能力を持った得体の知れない存在だったが、おそらく意図的に再び投入される玉音放送のシーンは、嘘と真実を反転させる。戦争当時、戦死したとされる人物の無事をうたった稲荷さまは、当局によってどん底に突き落とされる。だが、終戦後何年も経ってから、予知は正しかったことがわかる。人間は、現実も虚構も背中合わせであることを知りながらも、ぎりぎりの精神状態に置かれると、信じられるものを捜し、頼ろうとする。稲荷さまも、玉音放送で崩れ落ちた現人神も、そうした意識がつくったものなのかもしれない。白く長い橋に誘われ、神秘的なその一瞬の風景を、垣間見た気がした。



いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ
早大文芸科卒
79「流謫（るたく）の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著『緑の手紙』（読売新聞・NTTプリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・『鉄の光』「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ」「破壊者たち」「文芸思潮」編集長

読み応えと一貫性

五十嵐勉

第十一回まほろば賞候補作はいい作品が揃った。それぞれ優れた点があり、読み応えのある内容で、どの作品にも何らかの賞を与えたい気持ちも動いた。結果的に四作品の受賞が決まったが、その差は瑕疵の有無と、捉え方の深浅だった。これらは改良も可能なので、ぜひ掘削を深くし、傷を補って、完成させてほしい。昨今の浮薄な芥川賞作品などよりもはるかにいい作品になるはずである。

最後の投票の段階では、江平完司氏の「シーランチの住宅」と関谷雄孝氏の「白く長い橋」ほぼ並んだが、私には、「白く長い橋」の透明感のある宗教家の主人公の生き方と

行動が、天皇制批判の刃を隠し持っているその尖鋭さが、形を取り過ぎているように映った。予言と透視という超越的な力が権力を貫通するのは自然だとしても、戦中、戦後という背景の劇的転換によって、簡単に体制批判の英雄になってしまうそれが、両刃の剣のような危うさを感じさせるところに不満を抱いた。強く推し切れなかった理由はそこにある。しかし老衰を迎えて現実が幻になって浮かびその彼方から架けられてくる橋のように、過去の懐疑が新たな姿で浮かび上がってくる設定点や、海と砂山の描写、戦後の混乱の中で薬の行商のような仕事が異様な光彩を放っている点、若い宗教家の清廉な行為の貫きは、鮮やかに一つの世界を現出していて、読み応えがあった。特別賞には十分の作品と思った。

まほろば賞受賞作品の「シーランチの住宅」は、若い建築家のアメリカ修行の苦闘を刻んでいる作品だが、建築という創造の本質に迫った掘削力や、周辺人物の存在感、なかんづくバッドという師匠の人物の強烈な個性は、戦争という破壊行為との対決まで内包していて、奥行を豊かにしている。シーランチという地の自然描写も、サンフランシスコの描写も、文章の中にしっかり根を張っている。最後のバッドの遺書も簡潔ななかに感動を呼ぶ。アメリカという国の一つの側面を浮かび上がらせている点でも、まほろば賞にふさわしいと思った。

西山慶尚氏の「最後の海軍航空兵」は、氏の一貫した姿勢を評価した。西山氏はこれまでずっと特攻兵を追い、そこに潜む人間の姿を追究してきた。今回の作品はその集大成とも言える覚悟が散りばめられていて、それが押しつけがましくなく、淡々と霧のような自然な包み方で浮かび上がらせているところに、死の秘密に迫る深い息づきを感じた。死とは何か、生とは何か、婉曲に、そっと問いかけてくるそのやわらかさに、深い秘密に迫る一つの到達点が結晶されている気がした。河林満賞に値する作品だった。

紺野夏子氏の「百日の記」は素材がおもしろい。朝鮮戦争の脱走兵の話は初めて読むもので、脱走黒人兵に犯されて子供を産むストーリーの展開は、牽引力がある。中上紀選考委員がこの作品を強く推して「中上紀賞」を授賞することになったが、それだけの魅力がこのストーリー展開の中には確かにある。ただ、殺された黒人の骨の方に比重がかかり、生まれた子のほうに視線があまりいかなかったために、現在面の迫力が削がれた結果になったのは惜しまれる。これは創作している最中には往々にしてはまってしまう齟齬ではあるだろう。三田誠広選考委員が鋭く指摘したように、ハワイで育てられた息子の黒人が訪ねてくるところを端緒にすればもっといい展開が可能だったと思う。その指摘に全面的に賛同するので、ここを基軸に書き直すことも考えられる。作家はよい作品にするためには、機会を

極力捉えて改良に全力を尽くすべきと思う。格段によい作品になるはずである。

こしばきこう氏の筆力を私は基本的には信頼している。「暗い森」に見る北海道の雪の風景の描写力、鹿の群れを遠望するシーンも、その筆力を存分に発揮していて、迫ってくる。テーマも現代の人間が直面している問題に正面からぶつかっている力強さがあり、その迫った問題は我々の足元を深く穿ってくる。力量的にはトップクラスだが、この作品に限って言えば、父親と母親の人物造形があまりに人工的で自然さを損なっているところに、瑕疵を覚えた。主人公が大学をやめた理由も説得力をもっていない。父親像も結ばれていない。母親像も宙に浮いている。テーマにかかわっているようでありながら、逆にテーマを曖昧にしている存在になってしまっている。周辺人物に足を引っ張られた。ぜひ改良していただきたい。

たいらいさとし氏の「サクラサクサク」は、若い世代でなければ書けない新しい素材である。バーチャルを通しての人間関係の盲点を突いて、切なくなるような現代の不毛を浮かび上がらせている点で、時代を確かに切り取っている。その新鮮さはいい。中東の戦争への関連も悪くない。淋しい善良な人間が、騙されて搾り取られていく姿も、よく浮かび上がらせている。しかしこの寂しさの本質は何か、その問いをもっと絞り込み、インターネットやスマホなどに依存しなければ生きられない現代人の不毛の本質をもっと深く抉り出すところに、真の問題性を提示することができたら、成功作になる。続けてこのテーマに取り組み、現代の本質をいっそう深く鋭く糾弾してほしい。

選考会風景

あなたも
文藝家協会に入りませんか！

公益社団法人日本文藝家協会は創立90年を超える文学者団体です。著作権の保護、法律や税務に関する相談、健康保険、文学者の墓、『文藝年鑑』の編集などの活動を続けています。『文藝年鑑』に名前も記載されます。年に一度の総会で、作家の懇親会も催されます。

入会資格は「文芸的著述を主な活動としている」文学者です。プロの作家だけでなく同人誌で活躍されている方にも資格があります。理事などの推薦が必要ですが、活動を証明する同人誌のバックナンバーなどがあれば事務局で紹介します。

会費などの詳細については事務局にお問い合わせください。

公益社団法人 日本文藝家協会

〒102-8559

東京都千代田区紀尾井町　文藝春秋ビル新館5F

☎03-3265-9657　bungei@bungeika.or.jp

http://www.bungeika.or.jp/

まほろば賞　受賞の言葉　江平完司

第十一回まほろば賞を受賞し感謝の気持ちです。

幼いころから宇宙の中心にいることを不思議に思っていました。

ルイス・ベネディクトの「菊と刀」にあるとおりの幸せな幼児期を過ごし独立の気運を得ると、「あめりか」に旅立ったのですが、「あめりか」には大いなる苦悩が待ち構えていました。

十年の滞在のあと日本に帰国し結婚して宇宙の中心は世界の半分につながり、子供を通して次世代に、建築の仕事を通じて惜しみなく力を尽くす仲間にもつながりました。

「文芸思潮」二〇一七年夏号に掲載された同人誌作家の作品の完成度に脱帽し、なにゆえに、わが作品が推挙されたのかいまだに判然としません。しかし、なにはともあれ四人の審査委員の推挙を得て全国同人雑誌最優秀賞をいただき、行く手には希望が見えてきました。一寸先は闇かもしれませんが、文学は闇をも糧にする。苦悩と闇に満ちた「あめりか」が、私にとって大いなる収穫のときであるように。「文芸思潮」の支援のもと、「新しい試みを求める文学の魂が、ひょいと足を置いて立って見せるのではないか。そんな気もする（八覚正大）」となりたいものです。

作品掲載に当たって文学上の貴重な示唆を与えてくださった五十嵐勉編集長、そして支援を惜しまぬ朝日カルチャー「小説作法教室」のよきライバルたち、さらには、わが文学の恩師、尾高修也先生に感謝の念をささげたい。

江平完司

えひら　かんじ

1940 東京生まれ
都立西高を経て、米国カリフルニア大学バークレイ建築学科卒
ウィスラー・パトリア・ソーシエーツ
松田平田坂本設計事務所勤務を経て独立
建築設計事務所「江平建築事務所」主宰
建築作品／Yahoo! JAPAN「江平完司」参照
一級建築士
日本建築家協会登録建築家

特別賞　受賞の言葉　関谷雄孝

夕方五時半。外はもう暗くなり、今年もいよいよ秋に入るなと思っていた時、五十嵐勉編集長から電話が入り、結果を聞いた。

きっと、人生の最期か、一つ前になるのかと思うこの作品が、大勢の人に読んでいただける機会を与えて貰えたのは嬉しかった。

近頃は、掌の上で生の時間を遊ぶように日々を送っているが、この掌の上で他人の生命を転がすような仕事をずい分続けてきた。そんな私が書いた作品群の最後に戦後十八歳の時に出会った、稲荷さまと呼ばれる神憑りの人物がテーマだったという事実に改めて気持ちが昂揚した。

こんな時間に、こんな空間と出会い、こう感じる心を持った自分の生きた幸運を単純に喜んでいる。

二千十七年九月二十七日

関谷雄孝

せきや　ゆうこう

1930　東京両国の竪川際に生まれる
53　昭和大学医学部卒業
61　両国立川際にて外科・整形外科医院を開業
2013　閉院

同人歴「作家」「小説家」「カプリチオ」

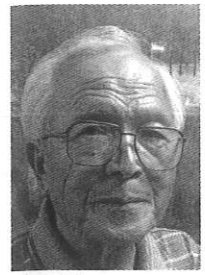
河林満賞　受賞の言葉　西山慶尚

今回の作品「最後の海軍飛行兵」は、松山市在住の杉野富也さんという方をモデルにして書いたノン・フィクションで、登場人物の名前も、杉野さん以外はすべて実名です。これは杉野さんのご要望によるもので、「戦死した彼らの供養にもなるから実名で書いてほしい」という申し入れがあったのです。

途中で何度か筆を置きました。文字通り、命をかけて戦った特攻隊員たちのことをあの戦争の体験はおろか、その記憶さえおぼろ気な者が書いていいものかどうか、という思いが込み上げてきたからです。こうして書き上げた作品を、杉野さんは戦死者の遺族の方々や、あちこちの知人に贈られたようです。

そして、今回の受賞。九十二歳になられた杉野さんは我がことのように喜ばれ、「これでもう思い遺すことは何もありません」とおっしゃいました、これは、自分のことが書いてある作品が評価されたからではなく、今や人々の記憶から消えようとしている戦友たちのことが、こうして再び人々の目に触れることになったことに対して、杉野さんはほっとされたのではなかろうかと思います。

戦後七十二年間、多くの特攻隊員を見送った杉野さんは、ずっと重いものを背負って生きてこられました。その杉野さんの重荷を多少なりとも取り除くことができたとすれば、この作品を書いた甲斐があったということになります。



西山慶尚

にしやま　よしひさ

1940　愛媛県西予市野村町（旧東宇和郡中筋村）に生まれる
65　東京教育大学理学部卒
その後、愛媛県内の公立高等学校等に勤務
2001　定年退職
1999年より文芸同人誌「海峡」に参加し、現在まで小説を発表する
愛媛県在住

中上紀賞　受賞の言葉　紺野夏子

光栄にも、中上紀さんの推薦を戴いたとの知らせを受けました。受賞にはあまり縁のない同人誌活動を続けている身にとって、優秀賞に選ばれたのも思いがけず嬉しいことでした。

「百日の記」は、私が子供の頃に住んでいた佐賀の田舎を舞台にしたものです。背振山地南麓にありましたが、歴史は古く、山に近い方が先に開けたような田舎町でした。

その頃、百歳を超えて生き抜いていた伯母二人が相次いで亡くなり、そのことも創作の動機になりました。

私が今住んでいるのは、その背振山地の北側にある福岡市ですが、戦後の米軍占領時代には多くの米軍兵士がこの街に住み、朝鮮戦争がはじまると、基地から半島へ出撃しました。現在は北九州市になっている方面の基地では、朝鮮に送られる黒人兵の集団脱走事件も起きました。みな捕えられて、前線に行き戦死したということですが、それ以外にも表に出ない脱走事件があっただろうことは想像できます。

戦後生まれの私ですが、母や伯母たちの生きていた時代の人々の思いを追体験するのも貴重なことでした。

この作品は私の故郷が書かせてくれたものです。受賞を心から嬉しく思います。ありがとうございました。

紺野夏子

こんの　なつこ

1949生　佐賀県佐賀市出身
福岡市在住
九州大学医学部附属看護学校卒業
南風の会同人
福岡市文学賞受賞
2012　文芸思潮まほろば賞優秀作「マーサの足音」

読者賞

「最後の海軍航空兵」　西山慶尚

寸評・感想

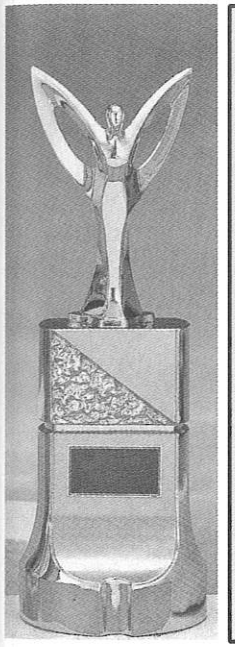
●「暗い森」は現代の問題を提起しつつ、しんみりと読ませる文章力がすばらしい。牧歌的な北海道の風景描写もよい。　木内是壽

●「サクラサクサク」は現代のバーチャル世界のねじれをよく描いている。現代の架空空間の怖さが覗いている。　西田宏明

●「シーランチの住宅」は師匠の建築家がすごく強烈で、ずっと頭に残ります。こういう個性の強い人間とその生き方を伝えることが文学の一つの使命ではないでしょうか。　山田　浩

●「サクラサクサク」が身近な感じでいいです。我々若い世代の虚しさや悲しさがよく描かれていて、共感を覚えました。さらにがんばって賞を取ってほしいです。　貝瀬まゆみ

●「暗い森」は雪の広がる風景が深く印象に残りました。鹿の死骸が横たわっているそこに、人間の未来もあるような気がしました。これからも読みたいです。　匿名希望



河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の終了によってまほろば賞のなかに組み入れられることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮

まほろば賞　読者賞　投票集計

投票者	白く長い橋	最後の海軍航空兵	サクラサクサク	百日の記	暗い森	シーランチの住宅
森本隆雄		20				
藤井総子		30				
鈴木　強		20				
今田真理子	10			10	10	
山口道子				20		
神通明美	2	1	4	3	5	5
竹田悦子		20				
和田信子				30		
永野英子		20				
松本秀樹		20				
宮脇永子				10		
竹田悦子		20				
下薗勲子				10		
渡邉弘子				20		
木内是壽					50	
計	12	151	4	103	65	5

まほろば賞は、4年前から読者賞を設けました。読者からの寄付金に加えて感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は上記の集計のような得点となりましたので、ここに御報告いたします。寄付金合計金額34000円を得票に従って比例配分し、各著者に贈らせていただきます。第11回まほろば賞読者賞は上記により「最後の海軍航空兵」が受賞しました。

これが大きく発展し、多数の方が参加して下さることを期待しております。

全国同人雑誌振興会

まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。読者の御支援をお待ちしております。

カプリチオ 45号

白く長い橋

関谷雄孝

八十二歳を越えた年末に、生まれ育った東京下町の運河のある街で、五十一年間続けてきた外科医院を閉じた。

何時の頃からか、一日中とか一年中とか、時間を纏まりとして考えるようになり出した。長い間、いつも時間の切れ端を細々と使っている日常だったので、思いっきり良く湯水のように使ってみたくなったんだと思った。飽きるほど自分だけのための生の時間が欲しかった。

やがて正面玄関を閉じ、真夜中の一秒も、白昼の一秒も、早朝や日暮れ時の心ざわめく一秒も、全部、私が自由に使うことができる嬉しい時がやってきた。

地区医師会からいろいろな指導を受けながら方々の役所に閉院届けを提出して、早速、診療に使っていた一階の大部分を住居に改造した。

二カ月ほどごたごたしたが、やがて二階にある書斎で送る時間が増えた。医書の類は一階の書棚に置き、ここには、いつも読み掛けの小説や、気に入っている裸婦のデッサンやクロッキーの画集、友人からの手紙や調べもの資料、同人雑誌、書き掛けの原稿などが乱雑に机の上を覆ってしまった。時には熱心に整理することもあったが、いつの間にか、取り留めなく流れる遊び心で散らかしてしまう。

二十七年前に内科医だった兄が癌で死んだ。五十五歳だった。

その兄が最後まで死の床の枕許に置いてあった、手斧の形をした、掌ぐらいの大きさの灰色の自然石があった。どこで拾ったのか無口だった兄は一言も語らなかったが、その石がいつもこの乱れている机の上のどこかに隠れていて、姿を見たいと思う時には見当たらなくなる。

折角手に入るようになった時間がこんなことになったら、それも人生の残り少ない時間であるだけに無惨な老醜が眼に見えて来る。

そこで、もう経験も知識もこれ以上無理して人生に付け加えなくても充分だと思った。誰にも誇る気を起さず、それまで生きてきた諸々のことを自分で素直に面白がり、出来たら舌で舐め尽くすように、もう一度机の上で納得してみるだけでいいだろうと考えた。

あい変わらず不慣れな時間を送り続けていると、思いも掛けない感覚が躯の方々から滲み出してくる気がしてきた。

右手の甲と触れるか触れないかの場所に、自分を取り囲む世界が拡がっているという事実にあらためて気が付くようになった。それが皮膚で閉じ込めている内側と対立する自然であり、三百八十億光年も先の広い宇宙の果まで続いているという感覚に軽く接した思いがした。当り前のことなのだが、自分でも驚くほど新鮮な思いだった。

そして、その感じに思いを灌いでいると、感情を包んでいるこちら側と遙か宇宙から繋がっているあちら側とのぎりぎりの境界に、こんなに身の近くで、訳の分からない新しい渾沌が出現しているように思えて愉快になった。

その上、若い頃の方が鋭く感じられると思っていた宇宙の果てへの拡がりが、近頃の方が指をすっと伸ばせばその先に、何の違和感もなしに感じられる気がするようになった。

六月末の或る晩に、寝室でこれまでにも一回あった、金縛りに似た現象を経験した。

南北に細長い我が家の二階の北の端、一時は病室に使った所でもあるので天井が普通より高く作ってあり、狭いが息苦しさはない。暑くも寒くもない、ほの暖かい夜だった。

真夜中頃だったと思う。真っ暗な中に自分の躯が浮き上がっていた。意識がない訳ではないが、充分に目覚めている状態でもなかった。浮いている躯は、長く経験している自分の体重とは違っていて、形が定かでなく大きさも分からず、唯、位置だけが奇妙にはっきり意識できた。そのまま眠りに入って翌朝眼を醒まし、ぼんやりと脳の皺の一つ一つを指先で伸ばすような気持で考えていると、或事柄に突き当った。今までに全く同じ様な状態を、確実に、経験したことがあると思った。そして簡単に気付いた。この思いと躯の感覚は、母親の子宮底に着床してから数日経った自分だということだった。思い付いた瞬間は確実にそうだと思った。躯がまだ小さいから重さを感じることはなく、位置だけがハッキリしている。周囲は母親の羊水と血液で

囲まれる曖昧な場所にいながら、初めて自分の位置が確定した瞬間の感動を意識している。笑い転げそうになるほど面白かった。

今迄だったらこの辺りでこれ以上は遊ばずに、日常生活を牛耳る尺度が幅をきかすことになるのだが、八十二を過ぎて、仕事を辞めて、自分の周囲に生な時間がごろごろ転がっているようになったこの時期に、自分が此の世に生き始めた頃の、意識の幽かな芽生えを味わう気分になれたことが素敵に思えた。

それに仕事を続けていた頃、毎日、患者さんを相手に出来るだけ合理的な言動で日を送っていた時には、夜中に突然躯が浮き上がったことをこんな筋道では全く考えられなかったが、それが今、何も衒うことなく、そのまま遊びながら考えられるのが楽しく、その方が生きている実感に余程近いと本気になって思った。

その橋は遠くから見ると、白く細くそして驚くほど長かった。

霞ヶ浦北浦の端に架かっているので、橋の下にはいつも満々と湛えられた豊かな水があった。

幅は、当時、木炭を燃料として走っていたバスがやっと擦れ違えるほどで、一日三便しかなかったのでいつも満員だった車中から、他人の頭の隙間越しに外を見ると、まるで直接水の上を走っているような錯覚に囚われて不安になった。

昭和二十二年四月。私は十七歳だった。

最後の最後に本当の神だと信じた天皇の、得体の知れない無様な声をラジオ放送で聞きながら、抜けるような蒼空が頭上にあった白昼夢の敗戦から二年。戦時中より食料が不足していて、周囲の人間の多くは餓えと貧困の、その日暮らしの生活を続けていた。

敗戦翌年三月の混乱した大学受験の中で、アメリカ占領軍の強制指導で開校した新制S医科大学の予科に、僥倖のように入学はしたが、奨学金を利用しても生活費や学費の捻出が大変で、母親の親戚からの借金と、知人を頼りにいろいろ雑多なアルバイトを重ねていた。

しかし春から晩夏に掛けてこの橋を十数回渡った特異なアルバイトだけは、今でも心の底に残っている。

手造りリュックに薬品を詰め込み、両手に一本ずつの一升瓶を風呂敷で包み提げていた。瓶の中には濃厚なオキシドール消毒薬が詰まっている。気化した過酸化水素ガスが何時吹き出すか分からず、新聞紙で軽く封をし麦わらで結わえてあった。だからバスの床には直接置けず常に浮かすように持ち上げていた。

橋の上を渡り始めると車の振動がなくなり、束の間、床に下ろして外を見ることが出来た。だから、その頃の沿道

の風景を思い出そうとすると、橋の上を通り過ぎる間の短い印象しかない。

逢かに見える対岸には低く平らな水田が続き、球状に刈り込まれた枝を頂上に持つ、真っ直ぐな木立が孤独な感じで所々に立っていた。

父は幼い頃に死んでいて、下町の運河傍で薬舗を開いていた気丈な母に育てられた。深夜の下町大空襲には医学生だった兄と母と三人で周囲を炎の壁で閉じ込められ、死の寸前まで詰められたが辛うじて生命を拾った。その後、兄は東京の知人宅で学生を続け、母と二人で栃木県の山村の親戚で終戦を迎えた。だが半年経っても全く生活の目処が立たず、無理を承知で、焼け跡へ全財産を投げ込んだ雑なバラックを建てて戻ったものの、空襲で死んだ人の数は想像を越え、国の経済の根底からの破綻もあって復興の進む気配は全くなかった。

表通りは少し整地されたが、一本内側に入ると、不格好に溶け曲がった鉄骨や赤錆びたトタン、崩れた瓦が散乱し、鉄筋コンクリート建ての小学校の窓は、まるで髑髏の眼窩が並ぶ様な空虚さだった。まだまだ客の姿も少ない。

そんな状況の店へ、戦前、薬品問屋の店員で毎日商品を配達してくれていた亘理（わたり）さんという背の低い青年が訪ねて来てくれた。

尖った氷の先で直接肌を刺されるような寒さだった冬が、ようやく二、三日春めいて来たかと思える日で、カーキ色の兵隊服を着て日焼けした顔が元気そうだった。彼は薬学専門学校を中退したと言っていただけあって、薬の知識が豊富で仕事が出来た。母が近況を尋ねたことから話が意外な展開を見せた。

敗戦寸前に兵隊にとられた彼は戦後失業していたが、やがて、地方には極度に薬が不足している所に眼をつけ、知人の多い鹿島灘の海岸沿いの半農半漁村地帯を選んで、昔の同僚から薬を流して貰い行商してみようと思い立った。地方の混乱は、まだ薬事法違反など取り締まる余裕もなかった。やって見ると売り上げは思いも掛けないほど上がり、殊に漁村地域で売ったオキシドールの希釈液は、細かい泡が沢山吹き出し傷治りが良いと大評判になった。

「そこで今回、販売の範囲を拡げてみようと思っているのです」

彼は落着いた口調で、鹿島神宮門前町の外れに小さな連絡所をつくり、今は一人で東京まで来て薬品を買付け運んでいるのを、これからはそこに常駐し、東京の知り合いの問屋から送って貰える薬品は送って貰い、世相が不安定なので途中で盗まれると損害の大きいものや湿気などの管理を必要とする大切な品物などだけを、月三回運んでくれる者を探そうかと考えている所だと言った。

「身許の分からない人には勿論頼めませんし、基本的には

薬の大切さを知っている者でなければいけないので人選が難しいんです」

その話を聞いて無性にその仕事がやりたくなった。バイト先の門前町も面白そうだったし、口に出された料金の額が高かった。

バスが白い橋を渡り切ってから二十分ほど走ると、鹿島神宮の大鳥居前に着き、すっかり寂れている町の外れの一画、二階が繋がって見えるくらいに傾いた建物の露地奥に、連絡所になっている鋳掛け屋があった。渋紙色の日焼けした顔に、得体の知れない危険を隠している小柄な余一と呼ばれている老人が一心に鍋の底を叩いていた。亘理さんの話では腕が良く、土地の諸事情に精通しているので連絡所を置かして貰ったのだが非常に役立っていると言う。

突然に浮かんだ白い橋の思い出があれよあれよという間に、暇が充分にある私を書斎の椅子に縛り付けた。

あの頃、あの土地で不思議な人物に出会った。町から外れた砂丘の蔭の、低い松の防風林の一角に、流木や廃材、ぶこつに修理した戸障子を寄せ集めて建てた粗末な小屋の前だった。

僅かに灰色が混ざった長髪を濃い紫色の組み紐で後ろに結び、切れ長の眼と細い鼻、時々、眼の奥に光が動きそれが微笑みに見えた。低い声で語り、年齢は四十過ぎとも思えたが、後で三十四歳だと知った。

何度も洗い晒した白い上衣と袴を穿き、地域では有名な人らしいが小さな稲荷社の教祖であり、右手全体が隠そうとはしないので発育障害が目立つ畸形だった。

実は亘理さんがこの地域で薬の行商を始めた頃の大切なお客だったのである。敗戦寸前から戦後にかけての苛酷な体験から気管支喘息が始まり、長い間苦しみ抜いていたが、当時市場では殆どが人工甘味料の材料に使われてしまっていた喘息特効薬の良質なエフェドリン剤を、彼が苦労して手に入れてやることが出来てやっと人並みの息が吸えたという。

私はその男に最初から或る種の嫌悪感を持っていた。

それと言うのも敗戦の日の正午に、私は心に烈しい衝撃を受け、二年経ったその当時も強い屈辱感と共に抱き続けていた。天皇を一時的だとは言え本当の神だと信じたということだった。理由の分からない自分への口惜しさが執拗に残っていて、時々疼いた。そんなこともあって、貧乏人から神憑(かみがか)りの詐欺的手段で銭を取り上げ生活しているらしい男の行為がどうしても許せなかった。二つの神の間には全く関係がないと思っていたが、男への不快感は深刻だった。

しかし亘理さんは、多くの人達からの噂を聞いて、まだ

信者の数も少なく、薬の支払いも滞りがちだった頃から、この人を楽にしてあげていれば、行商相手の客が確実に増えると思っていたと語った。

私は大きな荷を東京から連絡所まで運んで、亘理さんと荷の整理をした後、手書き地図で稲荷社へ廻り、大切な薬を手渡してから東京へ戻ることになった。販売や集金の仕事はなかった。

小屋には満足な出入り口はなく、何枚もの筵(むしろ)が垂れ下がり、中央の床には畳が二枚敷いてある以外はやはり筵だった。入り口で出会ったその人は合掌し、ボロを着た信者数人が坐っている中を小屋の一番奥まで案内してくれた。混じり合った体臭が匂ったが、どこからか光が入る工夫がしてあるらしく薄暗いが必要な明るさはあった。

厳重に包んである鉛筆箱ほどの大きさの包みを渡すと、その人は早速その中の粉薬の一服を水も含まずに口に入れた。ゆっくりした片手動作で、口の端を汚しながら呑む姿に私は苛立ちを覚えた。

連絡所へ出掛ける日時は、学校の授業内容を考えて水曜日早朝、両国駅始発の銚子行きに決めていた。

当時は、国鉄全体が疲弊していて、使える車輌数も燃料も不足がちで、乗車券が制限されなかなか手に入らなかったが、前日に新橋駅前の闇市の中の薬問屋へ行くと、運ぶ品物と一緒に往復の切符も用意されていた。

順調にアルバイトは進んだ。

砂丘の蔭の小屋へ行く度に信者から稲荷さまと呼ばれている人物には何回も会うことになったが、東京の焼け跡の様子や大学の生活を聞かれるだけで、殆ど会話らしい会話はしないで薬の包みを手渡すだけで別れた。

ある日、黙って向き合っている時、ふと私の躯の中へ透明なものが吹き込まれているような違和感を覚えた。それは不思議な感触で、液体とも気体とも違い、躯が軽くなるようで決して不愉快ではなく、それに全く作為的な感じがしなかった。

彼の眼の動かし方のためなのか低音の話し方のせいなのか分からなかったが、しばらくは気になりながらも内緒事のような気持で誰にも言わず黙っていた。そのうち、信者の一人が同じことを仲間に囁いているのを耳にしたので、早速、亘理さんに尋ねてみると、

「なにしろ不思議な人物だからな」

とだけ、ぼそりと言った。

出会った当初は、狐信仰の土俗習慣の上にあぐらをかいて、下衆な仕掛けで生計を立てているに違いないと、あの人のことを見下していたのだが、しばらく見ているうちに、

貧しいが純朴そうな信者達の手で洗い晒された白い上衣と袴を身に着け、素足に草履で歩く身のこなし方は駘蕩としているが揺るぎがなく、自分の食うことなどは全く考えていない、何処か抜け出した所で生きている動作のように思えるようになり、私の心の不快さが薄れてきた。

そして私の中に、敗戦の日の正午のことを思い出すことが増えた。

予告されたラジオの全国放送を夏の蒼空の下で待ちながら、十五歳の私は、その時、天皇をこの世の唯一の神だと思い込もうとしていた。

その十日前、戦災に遭って疎開していた地方中学で何故か急に微分積分学の特別講義があった。それまでは公式として覚え込むだけだった球の体積が、薄い切片を積み重ねる考えから算出されると理解できたことが嬉しくて、思い出すたび躯が震えた。一方、そんな私の頭の中には反復して教え込まれていた、天皇が生きた神であると言う想念がしっくりとは定着していなかったが根強く残っていて、いざという時には超人的なエネルギーを発揮するという噂の方が真剣な期待を抱かせてくれていた。

部落の二十人足らずの大人が地区長の庭先の土間に正座して、一言も声を出さずに予告の正午になるのを待った。天頂から白熱灯の様な陽光が射し、蝉の声も跡絶えた。白い光に一層の圧力が加わった。突然、神の声とはどんな声なのだろうと思った。初めて神を気持で意識した瞬間だった。そして周囲に起こる天変地異に備えて思わず躯を縮こまらせた。

無様な、息の洩れる、覇気の全くない男の声が、やっとの状態で内容が不明な言葉の羅列を並べ続け、やがて、二十数分前までは、天皇を現人神と仕立て上げていた放送局員の群れが解説口調でいろいろ語りだした。

瞬間に起こった天皇に裏切られたという怒りは、ずい分の時間を置いて、晴天のまま暮れて行く緋色の夕焼けを見詰めているうちに腹の底から込み上げてきた。訳も分からず苛立たしくて仕方がなかった。

これからの大日本帝国がどう変わるとか、日常の生活が壊れるなどと大人達が口々に話していることよりも、天皇へ腹が立ち、どう考えてもあの愚鈍な声の調子が許せなかった。それに胸の一カ所が痛んで仕方ないのは、あの声を耳にする寸前に、あの声の持ち主を一瞬でも神と信じた自分が居ることだった。あれほど物理や化学の条理の多くを覚え、数式の扱いを知っていた自分が、こんなに無様で不器用な発言しか出来ない男に騙されて、初めての神を感じてしまったことがどうしても許せなかった。

その時から二年。天皇は自らが神でなかったと言う「人間宣言」を掲げながら荒れ果てた日本各地を巡っていたが、十七歳になった私の心はまだ、根強い屈辱を含んだ怒りを

持ち続けていた。しかし一方、いつの間にか稲荷さまが示す何事もない人間表情に少しずつ気持が寄っていくのに気付いた。時に、近付き過ぎて急に反撥してみることもあったが、戦争という莫大な数の生命が消え失せた悲劇を眼の前で経験しながら、いまだに自分の中に生きるための焦点が出来上がってこない苛立ちがあった。

東京から月三回、アルバイトで稲荷さまの薬も運んでくるという医大予科生の噂は、信者だけでなく連絡所を中心に長閑に暮らしている人々の間でも珍しがられるようになり、稲荷社へ行く道すがらなどでも突然家の中から老婆などに声を掛けられ、甘薯と小麦粉で練った藷餅を親切に焼いて馳走してくれる人が出て来た。これが年中空腹に悩んでいた私には堪らなく旨かった。

土地柄とでも言うのだろうか、話好きの彼等は口々に村中の多彩な物語を話してくれたが、やはり稲荷さまについての話題が多く、いつの間にか知らないうちにその話の藪の中へ誘われて行くようになった。

国中にスペイン感冒が大流行し、翌年は不景気から米騒動が起こったという大正八年に、鹿島神宮大鳥居から南へ二キロほど行った深芝という集落の、人々からすっかり忘れ去られていた三坪ばかりの壊れた稲荷堂に、素性の知れない女が無断で住み着き、右手に畸形のある赤ん坊を育て始めたと言う。

女は村人が不審な眼で見る中を悲惨な子育てをしながら懸命に堂を守り続けた。そのうち堂の奥に転がっていた拳大の漆黒な石を御神体として祀り始め、御祓いや御告げで小銭を稼ぐと、堂の周りに手入れをして数本の小さな赤い幟を立て、三年も経たないうちに二人の通いの小娘を使うまでの神社に仕立てた。

信者の数人から聞いた話を纏めると、こんな縁起が出来た。

奇跡の様に育った稲荷堂の子は、誰に名付けて貰ったのか百介という妙な名前で呼ばれるようになり、三歳の夏に堂の前で遊んでいる時、草叢から飛び出してくる、まだ現われていない次の蝶の翅色を言い当てたという話が伝えられている。母親は御堂を守り通した功徳がこの子に舞い降りたと三日三晩泣いて喜んだと、信者の老婆が話してくれた。

やがて、鋳掛け屋の余一老人と挨拶を交わすようになり、驚くほど細かく知っている町のことを、時々教えてくれるようになった。深芝稲荷社にだんだんと人気が集まり始めると、信者の中で株で儲けた者が寄進してくれるようになり、堂周辺の安値の土地を次々に手に入れ、役所からの許可も貰ったと言う。百介が十六歳になった時、地所内から突然泉が湧き出し、母親は早速周囲を岩で囲み、樹木を

植え、朱塗りの橋まで造って稲荷社の不思議に仕立て上げた。霞ヶ浦と利根川に挟まれた場所なので水はよく出る土地だった。当時近くに出来た軍需工場群の好景気と、工員人数の増加に便乗するように稲荷社の評判も上がり、余一老人の皮肉な口調で言えば、日本が惨めな敗戦に追い込まれていく勢と、逆な方向の調子良さで御守り札を売り上げ、御告げや御祈祷で儲けたという。

「……深芝稲荷大明神社の頂点は紀元二千六百年の大祝日の日だったと思うな」

日本人離れした彫りの深い顔に、珍しく笑い皺をつくりながら老人が痛高い声で言った。

「すっかり戦争に深入り過ぎて身動きが取れなくなった陸軍が、何とかして国威発揚をしようと仕掛けた祭りなんだ。鹿島神宮は昔から戦の神様として有名だったので盛大な武者行列で盛り上げることになってな、寄進料のずば抜けて多かった百介が飛び切り高い位置で行列に参加したさ。成り上がり者と陰口を叩く者もいたが、濃紺の烏帽子に薄水色の直垂、腰に脇差、栗毛に跨がった百介は、陽に当たったことがないので周囲の者とは全く違う絵巻からそのまま抜け出たような若武者姿で、一部では非難の声もあったが、多くの娘らの話題になってな、信者の数が数段増えて母親の思う壺だった訳さ。あの女はなかなかの遣り手だったが、その半年後には心臓病でころりと死んでしまったわ」

話し終える直前の余一老人の口調が、微妙だったのを覚えている。その時期、多感なあの人がどんな気持で母親の操り人形のように生きていたのか、誰も語ってくれる人がいないので分からなかったが、小学校時代の担任教師達が口を揃えて学習能力の非凡さに驚き進学を勧めたのを母親は小学校で止めさせ、その先は知人の教師数人に交代で古典や英語の基礎を神殿の奥で教えて貰い、好きな本は東京の書店へ本人が自由に直接注文していたということだった。

木炭燃料のバスのエンジンの調子が悪くて連絡所へ二時間も遅れて着いた日があった。慌てて荷の整理をして砂丘へ向かったが、この道も大分歩き馴れて来た。南北に走る県道を横切って海沿いの地域に入ると、所々に数軒ずつ軒の低い家が固まり、砂混じりの畑と防風林が続いていたが、突然、沢山の弾痕がある広大な戦時中の飛行場跡に出た。平らな面が殆どないほど崩された滑走路に、白い光が怒ったように反射している。やがてビル三階ほどの高さの、ゆるやかな砂丘が現われ、その先に鹿島灘が眠りこけた巨人の寝息の単調なうねりを見せていた。

丸い雲の塊が次々に沖へ向かって流れた。

近付くと砂丘の頂上辺りにこちらの方を眺め、白い袴から針金のような細い脛を風に向かってしなわせて居る人影が見えた。

人影は私に気が付くと飛ぶように砂丘を駈け下って来た。もしかすると稲荷さまに喘息発作が続けて起こり、薬を全部呑み尽くしてしまって砂丘の上で待っていたのかもしれないと思った。その上来る時間が遅れたので気持が焦っていたのだろうか。

「今日は来ないかもしれないと心配になりましたか」

意地の悪い、小さな優越感が湧いた記憶がある。

「いや、今朝。両国駅で始発列車に乗り込む貴方の影を見ていますから……」

いつもの優しい微笑を浮かべながら言った。その言葉の一つ一つを今もしっかり覚えているが、その言葉にどんな反応を起こしたのか、自分の気持の記憶は曖昧だった。ただ、その事実に頷いた訳ではなかったものの、反射的に腹立たしい拒絶を返さなかったことだけは確かだった。

その日、稲荷さまと別れた後、防風林に沿ったバス道路の一角にある、錆で字が消え円板だけになった停留所でバスを待った。二十分後に来る予定だったがどの位遅れて来るのか分からない。うっかりすると既に満員で乗せて貰えない時もある。そうなると四キロ程歩かなければならない、腹は減っているし、弁当の蒸し藷の残量も限りなく心細かった。

稲荷社の隆盛な頃の話を聞かされているうちに、ふと、今は何故、町はずれの砂丘の蔭にうらぶれた姿でいるのか誰も話してくれないのを奇怪に思うようになった。

一度、余一老人が「とんでもない出来事が起こってな」と言い掛けながら、そのままにしたことがあったが、世間に公開できないような黒い事件でもあったのかと考え、機会を見て亘理さんに思い切って尋ねてみた。いつも顔を合わせている時は在庫整理をやっているのでゆっくり話して貰えなかったが、彼は点検の眼を動かしながらも話してくれた。

「それはこの辺りでも有名な事件らしいのだが詳しいことは私も良く知らないんだ。聞いて見ても、まるで古文書みたいに虫喰いの個所が沢山あってな……。なんでも、戦争がぎりぎりの末期に、警察を中心に憲兵まで加わって突然稲荷社が徹底した破壊的な捜索を受けたらしいんだ。稲荷さまも長期間留置されたらしい。しかし、その事件が有名になって稲荷さまの名前が世に出たのは、どうやら戦争が終わった後と聞いている……。鋳掛け屋の余一爺さんが、例の通り、よく知っているらしいから、この話に興味があるのなら汽車の時間をよく調べてからゆっくり話を聞いてみたらいい。国が戦争で敗れる時の話なんて、余程運の良い者しか聞けないものなんだ。だが、この話、最後の最後は本人から直接聞かなければ分からないらしいぞ。そうなると、難しいことになるだろうよ」

亘理さんも最後は含みを持った言葉で締めた。

「あの事件があったのはな。本土にアメリカ軍が上陸してくるという噂が、本気話になってきた頃でな……。それも九十九里浜が第一候補で、この辺りにも、中年から初老に近い丸腰の兵隊達が小学校の講堂に駆り集められ、そこら中やたらに戦車壕を掘っては枯れ草で覆うという作業を殴られながら続けていてな。アメリカの艦載機の空襲も始まっていて、地域全体が気が狂う寸前の様に神経をぴりぴりさせていたんだ」

夜のように暗い曇り空が十日以上も続いた日の朝八時頃だったと言う。

稲荷社の社殿の周囲を二十数人の警官が取り囲み土足で踏み込むと、稲荷さまを、次いで信者幹部、事務員、巫女まで片っ端から無蓋トラックに乗せ中央署へ連行した。同時に、別働隊が建物の全ゆる部位、柱や戸障子、柵、天井裏から床板、床下、神殿、壁を剥がし木組みを壊し徹底的に調べた。どうやらアメリカ軍上陸地点付近でのスパイ工作拠点の疑いを持った捜索だったらしいと言われた。

余一老人は朝から酒を飲んでいたらしく、時折、話の運びが乱れたり、呂律が廻らない時があった。

その当時日本沿岸はアメリカ海軍の潜水艦に封鎖され、殆ど外地から戻ってくる船はなかったが、その中を奇跡の船団が帰って来たのだと言う。そして、そんな非常事態の中をどうしたことか幸運な遺骨までが帰還して来た。

「この地方でも六柱の英霊が帰って来てな。その内の一柱が、深芝稲荷社の早い時期からの熱心な信者下山田りゅうの一人息子だったんだ。親が止めるのも聞かず志願で出征して行ったのだが、悪いことには半年前に父親が徴用されていた工場で受けた怪我がもとで死んでしまっていてな……」

りゅうが村役湯から配達された戦死公報を握り締め、眼を吊り上げ半狂乱で稲荷さまの所へ駆け込んで来た。信者幹部の浅岡が落着かせて話を聞くと、息子の春治が十日前も、昨夜も、枕許にやって来て「おっ母、俺らは元気で天子様にご奉公している」と告げていたのに、村役場の馬鹿達がこんな間違いの知らせをくれよった。そこで稲荷さまから正しい御告げを貰って安心したいと涙を溢れさせながら喚いた。浅岡はびっくりして、

「戦死公報に口を出すなんぞとんでもないことだ。お前は即刻死刑にされるぞ」

と突き返すと、りゅうが狂ったように暴れ出した。

それを見ていた稲荷さまは浅岡を片手で制しながら黙って神殿に消えると、一時間以上も御告げを受け、やがて少し落ち着いたりゅうの前へ現われ、

「よかったな、春治は生きておるわ。しかし、これは儂と

の秘密の話だから心の中に仕舞い込んで置いておくれ。間もなく戦争も終わるだろうから帰ってくるぞ」

傍らで聞いていた浅岡がまさかの言葉に再度仰天したが、気を取り直して、このことは誰にも絶対に洩らしてはいけないぞ、稲荷さままでが死刑になるとくどくど言い聞かせ、りゅうも大きく頷きながら帰って行ったのだが、思わぬことから約束が破られた。

村役場も下山田りゅうの変人振りを薄々知っていたので面倒が起こってはいけないと急いで、助役、在郷軍人会、愛国婦人会を動員して行列を仕立て、空襲の合間に遺骨を家まで運んだ。

その仰々しい行列を見てりゅうが激怒した。

「こんな、どこの馬の骨か分からねえものを運んで来やがって、こんな物が受け取れるか。春治は、今も、立派にお国の為に奉公しておるわ。稲荷さまも、はっきり生きておると御告げを下さったんだわ」

全員がその剣幕に息を呑んでいる静粛な中を、彼女の憎々しい声だけが通り抜けた。

日頃は警察や陸海軍省に多額な献金を惜し気もなく続けていた思想的にも無難な稲荷信仰集団の中心人物が、仲間内の遣り取りとは言え、戦死公報という国家の重要な通達を村民達の前で真っ向から否定したという情報が村役人の口で警察署へ通報された。

それが敵の上陸地点と言われる地域の正面に近い場所であったとすれば現地警察の受けた衝撃は大きく、翌日早朝に徹底した捜索の命令が出されたのである。

この動きの烈しい一連の話を煤でいぶされた土間の隅で、薄い木箱に腰を下ろして聞いていた私は、熱心に語りながらも舌がもつれる余一老人の語調のふらつきで、戦争末期の悲惨な内容であるのに、どこかに沢山の滑稽が顔を覗かせている気がしてならなかった。

確かにあの当時の戦死公報の持っていた国家権力は絶対なものだった。それは中学で受けた軍事教練の、無闇に殴りつけられた体罰から骨の髄まで滲み込んでいた。

夫を半年前に失って、毎日一人息子の無事だけを祈り続けていた下山田りゅうにとって、突然届けられた死の公報は胸の真ん中に太い棒を突き通されたほどの衝撃だったろう。彼女が頻りに夢枕に立つ息子の姿を信じ、稲荷さまの許へ戦死公報の誤りを求めて走ったのは、長年の信者の心情としてそうなるかなと思った。決して滑稽ではなかった。

一方、りゅうが手にした通知を見て、稲荷社との関わりを拒絶した浅岡の取り扱いは正しいと思った。

でも、りゅうの余りにも悲痛な泣き声を耳にしたからと言って、御告げの儀式を始めた稲荷さまの動作は、彼女の狂乱した感情を鎮めてやるためには御告げの形をとるのが

一番と思ったのだろう。しかし、一時間を越えても神殿から出て来なかったと聞いて私は、それ位の時間を掛けなければ烈しい狂乱は鎮まらないだろうという老獪な計算があったと思った。

三日後には、稲荷さま一人を除く全員が釈放されたと言う。

稲荷社の敷地内からは無線通信器具を始めとして爆発物、武器など一切見つからず、思想的な書籍も、沢山の宗教書以外には何も出なかった。

ただ、戦死公報に言葉を挟んだという疑いで稲荷さまの留置は継続された。

信者達が釈放されて社に戻ってみると大変なことになっていた。捜索時に建物が乱暴に扱われたことは知っていたが、この三日間に、あの稲荷社の全員がスパイだったという噂が一挙に広まり、日頃からの隆盛を心良く思っていなかった住民の一部集団が、物資不足への腹立ちもあって、壊された建物の間から、戸障子や机、椅子を勝手に持ち出した。数人の見張っていた警官は黙認だったという。

「そりゃ、建物はもう惨めで見られたものじゃなかった。それに御神体もごろ出しの有様だった」

ここまで語った老人は、ようやく稲荷社の没落史を語り終えてほっとしたのか、小さな溜息をついた。

「……稲荷さまは元々共産主義者なんかじゃないのは誰もが知っていたし、戦死公報の話だって考えてみれば、教祖信者の間の御告げだ。証拠になるものも何もない訳だ」

事件は地方警察署の過剰に反応した捜索活動だけだったのだが、戦死公報を否定したのが村の公式行事の席上で起こったのが問題だった。下山田りゅうは自分の失敗から稲荷さまが死刑になるかもしれないと言われると、慌てて役場に出頭し遺骨を自宅の仏間に引き取った。

程なく帰ってくると思った稲荷さまが何故かなかなか保釈にならなかった。

当時、警察にいろいろ知り合いのいた余一老人が探ってみると、稲荷さまは留置所の中では一度も烈しい言葉や抵抗を示さないのだが、なにか言うことを聞かないらしく、そのうちに刑事の方が意地になって調べ方を烈しくしているという噂が洩れてきたが、思いも掛けないほどの長い日数が流れた。

稲荷さまが体力を全く消耗し、その上初めての気管支喘息の発作を起こして殆ど動くことが出来ない状態で、緊急治療のためもあって仮釈放されたのは、戦争が終わる寸前だったと言う。信者の多くがスパイ事件で散逸してしまい、僅か四人で壊された社務所の一部を守っていた所へやっと戻れた。

やがて八月十五日で戦争が終わり、ようやく警察の干渉

から外されたりゅうが直ぐに信者の仲間へ入り熱心に世話を始めた。

「そんな躯の状態になるまで解放されなかったのは一体どんな理由があったんです」

「それがな……」

老人は浮かぬ顔で口ごもりながら答えた。

「……次第に分かってきたのは、普段の柔らかな応対からは考えられないほどの頑固さで、稲荷さまはあの時、自分の御告げを変えなかったと言うことだった。警察も最初は簡単に変更を認め、警官の言う通りに始末書を書くと思っていたらしいが、あの人は静かな拒絶を続けたらしいんだ。最後の頃には警察の体面もあり、随分烈しい取り調べ方をしたらしいが、その静かな拒絶は留置所から放り出されるまで続いたと言う話だ」

余一老人は、気に入ったらしい静かな拒絶という言葉を繰り返しながら、話す顔が恐ろしいほど真顔になっていた。

やがて稲荷さまの体力も少しは躯が動かせるようになったが、呼吸の方の具合はあい変わらず悪く、医者への代金だけが嵩んで稲荷社の土地を担保に借金したが、経済状態の混乱もあって結局手離すことになった。そこで、最後に集まった三十人足らずの信者で相談した上、誰の所有地でもない防風林の蔭に流木や廃材を使って三坪ほどの仮小屋を造り、御神体を中心に深芝稲荷大明神を移すことにした。

長々と続いた話がやっと現在の稲荷社にまで辿り着いた。

急用を片付けた亘理さんが戻って来て、荷の整理と打ち合わせを終えると、その日は砂丘の方角に用事があるというので稲荷さまに届ける薬を持って出かけて行き、私はそのまま東京へ戻ることになった。

戸口から出ようとした時、余一老人が急にノートの大きさの紙包みを差し出し、

「戦後の、此処辺りの、新聞記事などを碌に整理もしないで切り貼りしたものだが、稲荷さまの記事もあるから読んでみるかい」

と言った。亘理さんからいろいろ聞いていたので是非にと言って受け取り、家に戻ってから早々に読み始めた。

使い済み和紙を反対側に折り返して綴り、そこに新聞や雑誌、ガリ版の印刷物などを切って貼ってあるが、所々に白紙の上に黒インキの細かい文字の書き込みもあった。

終戦直後の部分は、紙質も悪く印刷が荒く、復員兵、復員船の記事や、食糧配給の知らせ、尋ね人欄などが雑然とあり、思想犯だった者達の釈放記事や、軍人官僚の自殺や逮捕、戦争犯罪人、極東軍事裁判の記事が続く中に、戦地で玉砕したと公表されていた皇軍兵士達の中の四万数千人が、現に捕虜となって各地で生きているという外国新聞の記事が転載されていた。痩せているが笑顔の写真が数葉あ

り、戦時中は絶対の権威を持っていた大本営発表が全くの嘘だったことが分かり、日本国中が大騒ぎだと報じてあった。

そこにも白紙が貼られ、下山田りゅうが御告げが当たっていたと言って、まるで息子が間もなく帰ってくるかのように村中を大声を挙げて走り廻ったとメモされている。

やがて、地方の役所や警察署などの戦中の横暴が曝露され始め、その者達から無惨に殺されたり、その者達に楯を突いて死んだり、苦しめられ抵抗に立ち上がって英雄になった話などが囃し立てられる様に次々記事として掲載されていた。小さな記事や、大々的なキャンペーン記事が並んでいる中に稲荷さまの話があった。

戦死公報の内容を正面切って否定するという、戦時下としては全く考えられないような反逆を行い、警察で酷しい弾圧を受けながら意志を変えなかった男として稲荷さまが取り上げられ、話が面白いと思ったのか、東京の大新聞の記者が直接来て取材をしていた。現在の砂丘蔭の荒れ小屋に一層の興味を持ったらしく、地域警察の暴力的で過剰な捜査の行き過ぎによって、当時、地域で一番華麗だった神殿が破壊されたと書き、壊される前と現在の筵小屋の写真を興味本位に並べて掲載してあった。その他にも地方新聞数社の記事が切り貼りしてあったが、どの記事にも稲荷さまの顔写真も談話も載っていないのが不思議だった。しかし、或る雑誌らしい頁の一面に、『戦死公報反逆事件』という特別に面白い事件の首謀者は、その事件の手記を書いて出版させてくれれば、元の社殿の土地買い戻しと再建に協力するという某大手出版社の好条件に全く関心を示さないので、再興を切に願う信者の中から怒りが起き上がっていると言う記事があった。

そう言えば、東京でもある時期カストリ雑誌と呼ばれる出版物があって、エログロ物と一緒にそんな危ない形の英雄物語も盛んに出していたが、これほどまでに知名度が挙がりながら全く動かなかったという稲荷さまの姿勢は筋を通していた。

二週間隔てて連絡所に荷を運んだ。

砂丘に向かうと、太陽の光は一層強くなり、海に立ち上がる雲の峯は充実した輝きを見せていた。しかし、群青の空の一角には、もう針を並べた巻雲が黙って顔を覗かせ、次の季節の準備を始めている。

稲荷さまの生々しい終戦真際の受難の話を聞いた時から大分時間が経っていたが、その間に余一老人の切り貼り帳からの情報が重なっていた。

考えてみると此の地に来て稲荷さまと会ってから数カ月になるが、普通の大人との交際と違って、表現は可笑しいが肌を触れ合うと言うのか、生理を感じ合うような交際は

していなかった。だからあの人の肉体に加えられた暴力の様子は、余一老人も極力隠すように話してくれていたが衝撃は強かった。

久しぶりの砂混じりの道をなるべくその事を思い出さないようにして歩き続けていたが、いつもの滑走路が見える場所まで来ると、突然、留置所の中で黙って殴打されている痩せた稲荷さまの姿が浮かんだ。慌てて考えることを止めようと思ったが遅かった。打たれる度に折れそうな細い脛が跳ねた。

私は思わず足を止めた。

今まで裸の姿を持っていることさえ想像したことがなかっただけに無惨な印象が烈しかった。

その上この数日、心の中をざわつきながら動き廻っている思いがあった。

下山田りゅうの悲しさで狂った姿を見て神殿の奥へ消え、一時間も出て来なかったという稲荷さまの行為についてだった。最初に話を聞いた時には、狂乱しているりゅうの鎮まる時間を計算しての老獪さと見て、矢張り田舎教祖の茶番劇だったかと、笑い出すのを怺える苦しさに躯を震わせていた自分の姿が、烈しい地面の乱反射の中ではっきり思い出された。

しかし、熱に浮かされているような部分が何処かにはあるのだが、あの時、稲荷さまは正面切ってりゅうの息子の生命の存在を、改めて確認する気になったのではないかと言うことに、私の心が気付いた。しかし、誰が考えてもそんなことが起こる筈はなかった。奇跡の輸送船団に載せられやっと故郷に帰港した現実の遺骨があり、国家から正式な戦死公報が届けられた状態だった。これだけの現実に抗して、重大な犯罪になると分かりながら稲荷さまは、一途に息子の生存を信じ込んでいるりゅうの夢枕に立つ虚像のために、愚直と知りながら、自分の内に秘めるカオスに向かって手を合わせ、気を集中する決心をしたのかと思った。

その時、眼を射る烈しい光の反射を浴びながら、私は一気にあの人の中の芯が分かった気がした。溢れてくる涙で滲む沖の波を見詰めながら、稲荷さまの躯の内側を満たしている虚に似た何かを知った気がした。しかし、どちらにしてもまだ十七歳の意識の中だったので、浮ついた意気張ったものだったが、その瞬間は充分自分の中へ受け入れていた。

私は時間を掛けて気持を落ち着かせてから立ち上がると、砂丘の社に向かった。

稲荷社に着くと、筵が巻き上げられ、海からの風が部屋の中を気持良く通り抜けていて、信者の多くも防風林の蔭や手造りの日蔭で休んでいた。

稲荷さまは夏の半袖の上衣に短めな袴を穿き、いつもと変わらない微笑で出迎えてくれた。その微笑が私のぎこち

ない緊張を緩めた。やがて小屋の中心の畳の上にあの人はあぐらの形で坐り、信者の皆は外へ出て、風だけが吹き抜け、時折、潮鳴りが響いた。

今日は心の中に話したいことが沢山詰まっているように思えるのだが、何時もの様に顔を見合わせているうちに、話すということの意義が薄く感じられてきた。

狂い喚いた下山田りゅうを前に神殿に姿を消した一時間のことを聞いてみたいと、唇の裏側まで言葉が詰まっているのだが何時もの様に聞いて何が分かる、どんな意味が残る、と曖昧な言葉の形が崩れ出し、潮騒の音と混じる様になると、気が付いた時には別れの挨拶をしようとしていた。

「ひとつ、お聞きしていいですか」

私は腰を浮かしながら尋ねた。

「ええ、何でもどうぞ」

柔らかい声が返った。

「小学校を卒業してからずっと神殿の奥で本を読まれて過ごした時期があったと聞きました……」

「そう。開祖が私を中学へ行かせたくなくてね」

「その時代、生きることについてどんな風に思っていたんですか。自分の将来とか、読む本を選ぶ時とか……」

稲荷さまは、巻き上げられた筵の下から吹き抜けてくる海風に、しばらく顔を当てていたが、

「躯の底の辺りにある空洞のことかな」

小さな声で呟いた。素直な口調だった。

「……」

「そこに御告げが滲み出すためには、いつも虚ろでなければならないからね」

唇がもう二度と開いてくれないだろうと言う余韻を残して閉じられたのが分かった。

結果として、その時が稲荷さまとの最後の別れになった。

いつもの様に手造りのリュックと大きな風呂敷二枚を持って、大勢の人間で混雑し赤々と電灯が点っている六畳ほどの新橋の店に顔を出すと、角張った顔の店主が棒立ちのまま開口一番、

「どうやらバイトはなくなるらしいぞ」

と怒鳴るように言った。

亘理さんから店へ葉書で連絡があって、鹿島神宮地域一帯に間もなく、各家庭に薬を置いて使った分だけ集金するという、昔からある富山の置き薬会社が商売を再開するという通知が入り、今までの様な行商がもう出来ないと書いてあったと言う。全く唐突な話なので私も驚いたが、当時の連絡手段としては葉書が一番安価で正確だったので、まず新橋の問屋の方へ送られて来たのだろう。

「そうしてな、今回の運ぶ品物の件は中止との連絡だ。エフェドリンは在庫があると書いてある。急にバイトがなく

なって困るだろうが、今まで無許可、無鑑札、無資格でめちゃめちゃな仕事をやって来たのだから仕方ないやな」

店主と亘理さんとがどんな関係だったのか分からなかったが、彼は妙にそっけない言い方をした。その翌日に早速私の所にも葉書が届いた。

『あなたにも話したことがありましたが、置き薬会社が復興と決まり、今の仕事は廃業。今後、友人と始めようとしている仕事で頼めることあれば――詳細、後ほど』

あの頃のアルバイトは大方が場当たり的な仕事だったので、殆どが短期間で突然打ち切られ、碌な挨拶もなく繋がりが切られることが多かった。殊に仕事をする場所との距離が遠いと、安易に切符が手に入らない時代なので仕方がなかった。

薄く粗悪な紙質の葉書を見詰めながら、私はもう一度、あの橋を越えて行ってあの人達との別れが出来ないかと切実に思った。

日本国中に慢性の飢えた状態は続いていて、皆が食うことに直接関わっていない者との間で、実用性のない連絡を取る習慣がなくなっていた。遠距離の電話や旅することもまだまだ不自由であったこともあるが、それより相手を気持だけで想う心の余裕がなくなっていたのだ。

その後、全く亘理さんからの連絡はなく、白く長い橋の印象や鹿島神宮門前町を中心とした人達や、無言のままの夏雲の輝きも次第に私から消えて行った。

稲荷さまの唇の隙間から柔らかく流れ出た声を時々思い出すことがあったが、こちらから連絡する気力はもうなかった。

三年が経った。

銀行員十三人が一人の男に騙されて青酸カリで毒殺された帝銀事件をはじめ、太宰治の心中や、三鷹の労働組合員電車暴走事件、占領軍が裏で関与したと言われた下山総裁死体轢断事件など気持が荒れる出来事が続いていた。

四月の終わりの薄曇りの日に、突然、亘理さんが本当に久しぶりに運河傍の薬舗を訪ねてきてくれた。

本科へ移っていた私は、その日休講が二単位あるのを理由に家でごろごろして居たので会うことが出来た。バラック建てだった所を少し手入れして、店の後側に小部屋が一つ出来ていた。

「突然、バイトを止めさせてしまったり、その後も連絡できなくなり済みませんでした。実は、あの後も仕事がうまく行かなくて、少しの間身を隠したこともあったのです」

あの当時から見ると、精悍さは鈍ったが貫禄がついた彼はグレイのスーツを着ていた。最初に顔を出した母は、ぽつぽつ増えてきたお客の相手で店へ出たきりになり、結局二人だけで話した。窓がない部屋なので閉塞感があったが

次第に気持が解けてきて、期間は短かったが内容が豊富な思い出話が甦り、やがて現在の仕事の話に移った。話し上手な亘理さんからの情報には心が踊った。

まず彼は、現在少し活気が戻り掛けて来ている鹿島神宮門前町の参道の一隅で、昔から知り合いだった薬剤師の女性と結婚して薬局を開いたことを話した。

「それは良かったですね」

嬉しくなって喜ぶと、

「相手は年上で、亭主は戦病死したのです。子供がいなかったのだけがめっけものと言う所ですか」

語尾に強い張りがあったあの頃の口調とはずい分違っていた。

「あっ、そうだ。鋳掛け屋の爺さんのことは覚えていますねえ」

話題が変わった。余一老人の癖のある表情がくっきり浮かんだ。

「一昨年の冬。大雪の夜に独りで外を飲み歩いて、脳溢血で意識不明になりましてね。しかし、他人の三倍もの運動療法とやらをやって、今は一人で歩ける様になり、時々は簡単な鋳掛け仕事もやっているようです」

稲荷さまの話がなかなか出て来ないので、躯の具合が悪くて動けなくなっているのかと気になり出していた。後味の悪い突然の様な別れ方になっていた。しかし、一段と声を明るくした亘理さんが驚くような報告をした。

「あの方は今、元の深芝稲荷大明神の地所に立派な社殿を建て直して、少し太り気味になっていますが、あい変わらず静かな立居振舞で暮らしています。御告げの評判も良くて、隆盛を極めていますよ」

そこまで聞いて喜びでうわつく気持が起こったが、一方では同時に歪んだ感情が湧いた。私の心を揺らしたあの方の中を流れていたカオス。私も年齢を重ねただけ少しは大人の才覚を纏っていたが、矢張り、下世話な成功譚とは別の場所に置きたいという切ない想いがあった。不快な脅えを抱きながら亘理さんの話の残りを待った。

「下山田りゅうの息子、春治が還ってきたんです」

亘理さんは一気にそう言った。

「えっ」

「あれから一年半位も経った頃、戦場がめちゃめちゃに混乱していたミンダナオ島の奥地で、躯を壊して動けなくなり、戦友と二人で隠れていた所を発見され、奇跡的に生還して、地方では大きく報道されましてね」

「りゅうさんは喜んだでしょう」

「そりゃ大変でした。当時、あの辺りでは稲荷さまより有名人になりましてね。深芝稲荷の復興だって、りゅう婆さんが中心で動いたから出来たんだと今でも言われているんです」

その後、三十分ほど話を続けた彼は、昔勤めていた薬品問屋に寄ってみると言いながら帰って行った。

ようやく白く長い橋の辺り、水と風の豊かな水郷地帯で、人生を始めた時代に出会った人間群像の思い出物語を書き終えようとしている。

あれから後の長い年月を沢山の人達と出会いながら、一日一日を几帳面に送ってきた。そして今、仕事から殆ど解放され、坊さん達の言う、渡らなければならない諭しの川の場所や川幅なども、余り気に掛けないでゆっくりした好日を送っている。

それにしても頭上にある宇宙の広さの実感が、より拡がっている感じがして嬉しくて仕方がない。それもわざわざ高い場所へ登って空を観察する必要などなく、狭い四畳半の寝室で横になりながら、自分でその気になれば感じ取れるようになった。

しかし宇宙の長さや広さについては楽しいくらいに拡がったのだが、時間というやつは全く別のものらしく、初めは、その内に今までと違う味が出るかも知れないと待ってみたが、或る点から一方向へ無表情に進むという初めの感覚から微動だに感じが動かない。これが、いろいろな速度で目の前を上下左右全ゆる方向に飛び交うのを感じるまでにはまだだと思っている。

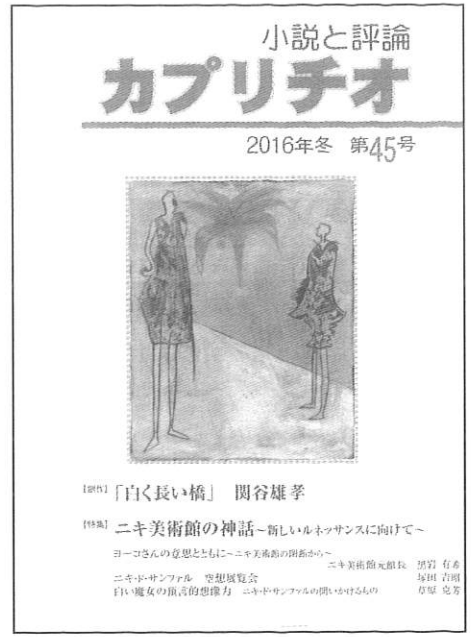
いつの間にかあの人から、この世の中には自分が意識して感じられる世界より広い世界が混在していて、仮令、それを肯定できなくても拒絶する傲慢さだけは捨てなければならない、という生き方を教えてもらった。そして信者達や村人からは、生きることの茫洋とした広さを見せられた気がしている。

あの土地で聞いた深芝稲荷大明神の縁起と、共に生きた稲荷さまの劇的で壮絶な生活史と、身の上に降り懸かってくる現実を静かに受け留めながらいつの間にか自分の胸に収め、落ち着いて暮らしていた姿勢が心に染みた。八十余年の歳月を生きてみて、あの時の躯や心に音もなく小さな破片として取り込んでいたものが、私の人生を、こんなにも多彩で豊かに生かせてくれたのだと思える。

あの人達とあの時代にあの年代で知り合えた幸運に単純に感動している。そして自分の頭の中にある自然を、隅から隅まで自分で納得する世界にして置きたいと思う傲慢さが、実は、格好悪いことなのだと思わせてくれたあの稲荷さまにもう一度会いたくなった……。

東京タワーが完成した年の暮れに、稲荷さまが呼吸不全で亡くなったという知らせを風の便りで聞いた。

（「カプリチオ」45号より転載）



関谷雄孝

せきや　ゆうこう

1930　東京両国の竪川際に生まれる
53　昭和大学医学部卒業
61　両国立川際にて外科・整形外科医院を開業
2013　閉院

同人歴「作家」「小説家」「カプリチオ」

1512円（税込／送料共）

1512円（税込／送料共）

御注文はアジア文化社まで

カプリチオ

東京都

毒まんじゅうであることを気づかせずに食べさせろ

■最初の名は『世紀末メロン』

ぼくが同人雑誌というものに入ったころは、まだ、思想を共有するものが集まって、その思想を主張するための道具が同人雑誌という考えが残っているころでした。ただ、そうした匂いは少しずつ消えて、共有する思想で集まるという考えはなくなりました。結果、激論とか、殴り合いの喧嘩は少なくなりましたが、年長者が新人の作品に強くあたるなごりはありました。もう、思想的な集団ではないから、思想的なことでぶつかることはできません。中身が抜け落ちたところで、文章が練れていない、とか、自分の体験から、このようなことはありえない、といった文章の表面的なことでやりとりがされたように思います。

はたして、そんな個人的印象なことで小説の書き方がわかるのかと思いました。合評が読んだ人の好き嫌いによって左右されているように思えてならない時代を過ごしました。

そこに『カプリチオ』という寄せ集めのグループが忽然とできたわけです。いろいろな同人雑誌にいた人間が集まり、一斉にはじめるのですから、メダカの学校ならぬ、誰もが同じ立場で、慣習に縛られずに出発できるような気がしました。周囲からはそんなものは同人雑誌恒例の三号で終わるといわれましたが、長い間に主従関係が生まれて、息苦しいなかでやるよりはましと思いました。

最初は『世紀末メロン』の同人雑誌名ではじめる予定でした。数年先に世紀が変わるときで、それまでは持つまい、ということから考えついた名前です。

それが世紀をまたいで、二十年以上まで残ってしまいました。ぼくとしては、いまだに在籍していることが不思議でなりません。名前も『カプリチオ』に変更したことも、よかったと思っています。これが『世紀末メロン』でやっていたら、説明がつきません。

■毒まんじゅうの小説哲学

同人雑誌に参加しながら考えてきたことは、人の作品の読み方です。思想が一緒ではないのだから、個人的好みで評価するべきではないというのが、ぼくにはありました。そんなことを考え出したころ、ご存じの方も多いと思いますが、縁あって、宮原昭夫氏が講師をされている小説学校に通うようになりました。そこで宮原氏から習ったものは、自慢話と、説教話と、押し付け話でやると、どんなにいい

様々な個性を広げて

内容の小説を書いても、読者は忌み嫌うということでした。たしかに、自分を省みても偉そうに書かれているものを読むと、小物のぼくなどは素直になれずに、反発したくなります。それなら、どう書けばいいのか。宮原氏にいわせれば、毒まんじゅうであることを気づかせずに食べさせろということでした。毒、それは書き手の自慢話などのようなものを指すのでしょう。それをうまそうなまんじゅうに隠して、気づかせないように喰わせて、自分の考えをひそかに相手に注入することだということです。

今回、関谷雄孝氏の「白く長い橋」を評価していただいて、たいへん感謝しています。

主人公は八二才です。戦争を体験した人のひとりです。この時代の人が過去を振り返って鮮烈に蘇るのは、終戦のときの一瞬ということを聞きます。当然だと思います。空中から人を殺すために爆弾を落とされたのです。こんな経験は、その時代の人たちしか知りません。まして、感受性のいちばん豊かなときに、それまでの価値が一転してしまう瞬間を経験しているのですから、たいへんな衝撃だと思います。価値観が変わった後に出逢った数々の人々の姿が、あざやかに立ちあがったように見えました。個人的には、主人公を通して、その人たちの息づかいを感じる気がしました。

カプリチオ 46 号

ぼくもそれなりの歳になりましたが、終戦は経験していません。知らない人間に、こうだったと押し付けてきたのではなくて、やんわりと見せたのですから、素直に反応ができたのでしょう。宮原氏のいう毒まんじゅうとして喰わされたから、素直に気持のなかに落ちてきたのだと思います。

■月の階（きざはし）の狂想曲

『カプリチオ』は、毒まんじゅうというか、読み手のなかのイメージを触発できるような作品が、ひとつでも多く載せることができたらいいな、と思います。書き手の主張ではなくて、読み手が素直に受け入れて、書き足りない部分をその人の想像力が埋めていってくれるような作品です。

同人雑誌の宿命として、合評会に出るときは、その席で何かをいわなければならないから、かならず読んでくれます。それゆえに、書き手は読んでくれるはずだという安堵の上にあぐらをかいています。読んでもらうには、時間がかかります。それだけに読む人の時間を無駄にさせないように頑張りたいものです。

この目標はなかなか難しくて、月のように遠くで輝く美しいものに似ています。

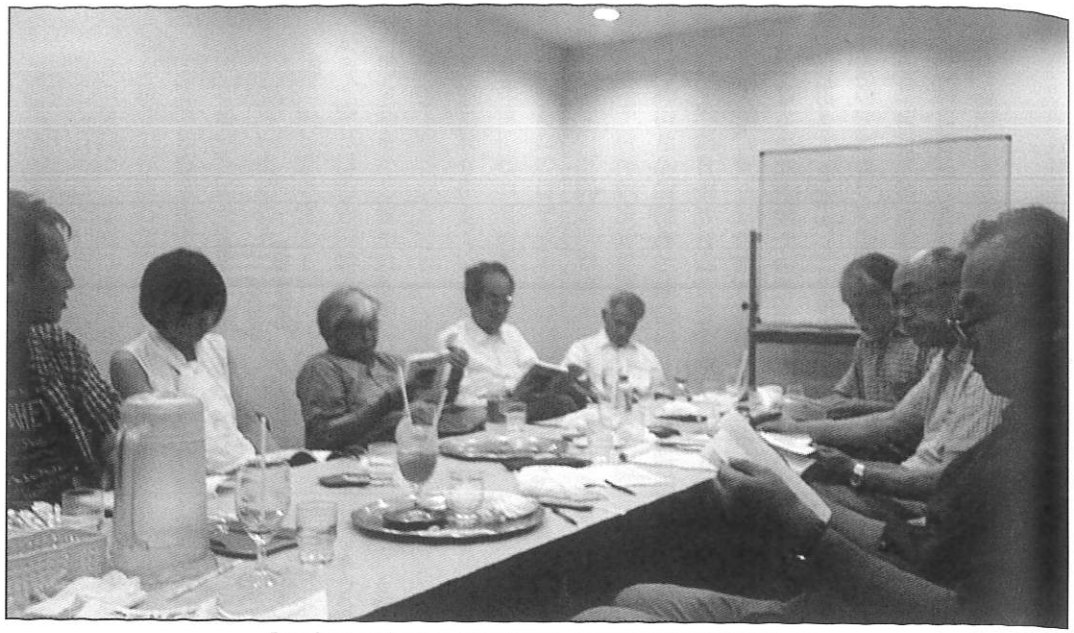
しかし、月の階（きざはし）を一歩一歩上ってゆけたらと考えます。理想ばかりを見ているような、阿呆な感じもします。

でも、狂想曲という意味を持つ『カプリチオ』という言葉にふさわしい活動のような気もしないでもありません。ちょっぴり、頑張ってやろうという気にもなります。

（塚田吉昭）

カプリチオ 事務局
二都文学の会
〒一四二・〇〇四二
東京都品川区豊町六・六・一七
塚田吉昭方☎〇三・六三二五・一二〇二

カプリチオ　読む人の時間を無駄にさせない



「カプリチオ」46 号合評会風景　7/23 汐留の会議スペース
（左から三人目、関谷雄孝氏）

海峡 37号

最後の海軍飛行兵

西山慶尚

一

杉田慎司さんに初めてお会いしたのは、今から八年前の平成二十年六月十九日のことである。

それまで、賢三は杉田さんの顔はおろか、名前すらよく存じ上げていなかったのだが、突然、姉の沙智子から頼まれ、杉田さんを案内して南予の旧中筋村まで赴くことになったのである。

現在は合併して西予市の野村町の一部になっているが、旧中筋村は賢三の郷里である。そこには戦死した兄の墓があり、杉田さんから、是非お参りをしたいという申し出があったので、姉の代わりに賢三が案内をすることになったのだった。

賢三の兄は予科練（海軍飛行予科練習生）を志願し、昭和十六年五月一日に土浦海軍航空隊へ入隊した。そして、谷田部、百里ケ原、佐伯、岩国などの海軍航空隊で厳しい訓練に励んだ後、昭和十九年の五月十一日、あ号作戦の命を受けた機動部隊の戦闘爆撃機搭乗員として空母「隼鷹」に乗艦、内地を出撃した。そして同年六月十九日、グアム島西方洋上で行なわれたマリアナ沖海戦に参戦し戦死した。享年二十一歳だった。

一方、杉田さんもまた予科練出身の飛行機乗りだった。

彼は兄より一年後の昭和十七年五月一日に土浦海軍航空隊に入隊している。そして、三重、高知、松山などの海軍航空隊を経て、最後は鹿児島県の鹿屋航空隊に配属され、艦上偵察機「彩雲」に搭乗し沖縄特攻作戦に従事していたが、無事生還した。

杉田さんら生き残った予科練出身の人たちは昭和五十九年に「雄飛会愛媛県人会」を結成した。そして、その年以降は毎年遺族を招いて慰霊祭を行ない、五年後の平成元年には、松山市の護国神社境内に「雄飛豫科練鎮魂之碑」を建立し、予科練戦没者の追悼に努めてきた。

賢三がその慰霊祭に参列するようになったのは遅く、初めて参列したのは平成十年の春だった。そのときの感動は今でも記憶に残っている。

「うちの兄貴も生きていたら、こういう年格好になっているのか……」

古稀を過ぎたと思われる予科練出身者の一人一人を眺めながら、賢三は彼らに対して初対面とは思えないような親しみと懐かしさを覚えると同時に、彼らが語っている予科連時代の思い出話にそれとなく耳を傾けながら、若き日の兄の姿に思いを馳せたのである。

その翌年の慰霊祭では、東京で声楽を勉強している姪の朋子が自分で作曲した鎮魂歌「火い火い明かれ」を献歌した。その歌詞は、信州に住んでいる賢三の姉が兄を偲んで作ったものだった。

クラシック歌手独特のボリュームのある澄んだ肉声が静かな会場に響きわたった。賢三は上を向いて目を瞑り、涙がこぼれ落ちるのをこらえた。

こうして、賢三は平成十年以降はほとんど毎年慰霊祭に参列していたのだが、その頃、杉田さんは既に会長などの役職を退いておられたので目立たず、杉田さんのことはほとんど知らず仕舞いだったのである。

ところが、賢三の生家の長女である沙智子は、慰霊祭が発足した当初から毎年欠かさず几帳面に参列していたので、杉田さんらの役員の方々とも顔見知りになり、親しい間柄になっていた。

それは、二十五年間にわたって戦没者の慰霊に努めてきた雄飛会愛媛県人会が会員と遺族の高齢化のため、止むなく解散することになった平成二十年四月二十九日の最後の慰霊祭の場でのことだった。

この最後の慰霊祭は、これまでの慰霊祭にも増して感動的だった。主催者代表の挨拶は戦没者への哀悼とその遺族への思い遣りが篭ったもので、それに応える遺族代表の挨拶もまた、言葉数は少なかったものの、感謝の気持ちが滲み出たものだった。

実は、このとき、主催者代表として挨拶をしたのは再び会長に復帰していた杉田さんだったのだが、賢三は不思議

なことに、杉田さんのことは何も記憶に残っていなかった。挨拶に聞き入っていた賢三にとって、誰が挨拶をしたのかということは二の次の関心事だったのだろう。

雄飛会愛媛県人会が保有していたいろいろな品物のうち、思い出に残るような貴重な品物は遺族と会員の希望者に譲渡されることになっていたが、ほとんどの品物は遺族の方へ渡った。これは、会員の方たちが遺族に配慮し、遠慮されたからである。

慰霊祭の諸行事も滞りなく終了し、参列者は三々五々に集まり思い思いの話に花を咲かせていた。そのとき、沙智子のところへ杉田さんがやってきて、

「私は前々からお兄さんのお墓参りをしたいと思っていたのですが、これまで実現できませんでした。それで、できましたら今度墓参で帰られる際に、私もご一緒させてもらったらと思うんですが、いかがなもんでしょうか。車は私が運転しますから」

と言った。

これまで、雄飛会として長年にわたって慰霊をしてきていただいた上に、さらに個人的に墓参までしていただく。杉田さんの申し出を聞いて、沙智子は感激した。

「ありがとうございます。そうしていただくと、兄もさぞ喜ぶことと思います……」

沙智子は声を詰まらせた。

「兄の命日は再来月の十九日でして、私も今年は墓参に帰りたいと思っていましたので、もし、杉田さんのご都合がよろしいようでしたら、一緒に行かれますか?」

「はい、私はいつでも都合がつきますので、是非ご一緒させてください」

話はたちどころにまとまった。

しかし、話はまとまったものの、沙智子には一つだけ気がかりなことがあった。というのは、二年前に傘寿を迎えた沙智子は腰椎の痛みを抱えていたのである。

これまで、お産のとき以外は一度も入院したことがないほど元気者だった沙智子も、寄る年波にはかなわなかった。家の中でぶらぶらしている分にはさほど支障がなかったものの、長時間の外出や遠出は心許なかったのである。

そこで沙智子は再来月の墓参に備え、近所の医院で治療やリハビリに励んでいたが、効果は芳しくなく、容態はむしろ日毎に悪化していき、六月に入ると、寝起きも自由にできなくなっていた。しかし、それでも沙智子は墓参に行くことを諦めず、「わたしゃ、這ってでも行く」と言い張って聞かなかった。

戦時中、学徒動員で名古屋へ動員され、ひもじい思いをしながらB29の激しい空襲をかいくぐって生き延びた沙智子は、いざとなったら肝が座っている。

「母さんはそれでいいかも知れんが、杉田さんに迷惑をかけるじゃないか」

長男が説得し、沙智子はようやく諦めた。

墓参を諦めた彼女は賢三のところへ電話をかけて事情を説明し、「杉田さんはせっかくそう言ってもらっているので、わたしの代わりに賢三が案内してくれまいか」と依頼してきたのである。

とっくに退職し、ぶらぶらしていた賢三に異存はなく、賢三が運転手兼案内者として同行することになった。

賢三の了解を取った沙智子は、すぐその足で杉田さんに電話をかけ、同行できなくなった理由を述べた後、同じ言葉を何度も繰り返して詫びた。

二

梅雨の合間、その日は朝から爽やかに晴れ上がり、何処かへ出かけるには絶好の日よりとなった。

賢三は杉田さんを迎えに行くべく朝八時に車で家を出て、新居浜インターから松山自動車道に乗って松山の南吉田へ向かった。

松山自動車道は盆や正月のシーズンには多少混み合ったり渋滞したりすることもあるが、それらのシーズン以外の日は大抵空いている。

その日もそうだった。前方を走っている車もなければ、追越しをかけてくる車もない。賢三はまるで自分専用の道路を走っているかのような贅沢でゆったりした気分に浸ると同時に、その反面では、こんな広い道路を自分一人で走っていていいものか、と何やら勿体なく申し訳ないような気もした。

五十分ほどして松山インターへ到着し、高速を降りる。そして、国道三十三号線と環状線を経て旧空港通りに入り、その旧空港通りを西へ向かっていると、やがて目印の陸橋が見えてきて、賢三はその陸橋のたもとにあるコンビニの駐車場の隅の方に車を停めた。時計を見ると、九時十分をさしていた。

「約束していた時刻よりだいぶ早く着いたので、杉田さんはまだ来ておられないだろう」

そう思いながら、車の窓越しに駐車場を見渡すと、コンビニの建物の角のところに小さな鞄と紙袋を下げた男の人が立っていた。狭い駐車場なので、彼我の距離はどれほどもない。

彼は、白の長袖シャツの上着にきちっと折り目のついた紺色のずぼんを履き、足元はよく磨かれた黒の革靴で決めている。長身痩躯で、かなり年配ではあるようだが、姿勢がよく背筋もピンと伸びている。しかも白皙にして彫りが深く、気難しい老哲学者のような雰囲気を漂わせている。

「杉田さんなのだろうか?」

賢三はそうも思った。

確かに、年格好からすると、杉田さんのようにも思えたが、その老哲学者のような雰囲気は、賢三が杉田さんに対して抱いていたイメージとは大きくかけ離れていたので、賢三は自ら名乗り出たりすることを躊躇し、そのままじっと相手の出方を窺っていた。

一方、彼も賢三のことを気にしているようで、時折、横目でちらちらと賢三の車の方へ視線を投げかけていた。そのような膠着状態はしばらく続いた。

気が張り詰めていたせいか、賢三は喉の渇きを覚えた。そこで、何か飲み物でも買って来ようと思ってドアを開けたとき、それを待っていたかのようにして、彼がゆっくりとした足取りで近づいてきた。賢三は慌てて車から降りた。

「ちょっとお尋ねしますが、あなたは沙智子先生の弟さんではないでしょうか?」

杉田さんが「先生」と呼んだのは、沙智子が教員上がりだったからである。

「はい、そうですけど」

「やはり、そうでしたか。私は杉田慎司と申します」

「杉田さんですか。初めてお目にかかります。本日は、遠方までご足労をおかけします」

「いえいえ、こちらこそ無理なお願いを申し上げて恐縮しております。どうかよろしくお願いします」

杉田さんは満面に笑みを湛え、やや高めのかすれた声で言った。その表情は最早気難しい老哲学者のそれではなく、以前、どこかで見かけたことのある人物の表情とよく似ていた。

「どこの誰だったのか?」

賢三は懸命に思い出そうとした。二、三の人物が脳裏を掠めたが、どうも彼らではない。彼らでないとすれば誰なのか。

賢三は、ついそこまで出そうになった記憶を飲み込み、もどかしい思いをしながらコンビニを後にした。

三

松山市から旧中筋村へ行くには、宇和島自動車道の卯之町インターで降りる経路もあるが、賢三は内子インターで降り、五十崎町を通って国道一九七線を経由する経路をとった。

肱川沿いを走っているこの国道は、かつては急カーブや隘路が続く悪路で、運転者の間では「行くな（一九七）酷道」と揶揄されていたものだが、その後、大規模な改修が行なわれたので、現在では快適なドライブコースにもなっている。

途中、鹿野川ダムの手前で、賢三は休憩を兼ねて「道の駅」へ立ち寄り、まだ昼食には早かったのだが、昼食用の弁当を買った。

というのも、過疎化が進んだこの地方には、これと言った食堂やレストランがないからである。昔ながらの古い食堂なら何軒かあるが、よそからきたお客さんを連れて行くには気が退けた。

弁当のコーナーには、地元の主婦たちが作ったと思われる何種類かの弁当が並んでいた。それらの弁当は、コンビニやスーパーで売っているものに比べると、色合いが地味でいかにも田舎風な感じがする。しかも、分量は三割方ほど多く値段は安い。賢三は、ばら寿司とまき寿司をそれぞれ二個とお茶を買った。

ダム湖である鹿野川湖は満水を湛え、車はその湖沿いの道路を順調に走って行く。そして、三つのトンネルを抜け橋を渡ったところで左折し、野村町へ通じる県道へ出た。そのとき、杉田さんが、「栗の木の慰霊碑にお参りをしたいので、ちょっと寄っていただきませんか」と言った。

その慰霊碑は、県道から栗の木という集落へ通じる道路をほんの少し登ったところにあり、花立にはまだ新しい榊が生けてあった。昭和二十年に栗の木に墜落し殉職した二人の予科練出身者を悼み、地元の人々が協力し平成八年に建立したものだった。同じ町内の出身でありながら、賢三はこれまで、ここに慰霊碑が建っていることを知らなかった。

「鎮魂」と横書きで大書された碑には室蘭市出身の神埼十四春飛行兵曹長と大阪市出身の澤田納一等飛行兵曹の二人の名前が刻まれていた。賢三は、十八歳や十九歳の若者が異郷の地で散り、こうして異郷の人々に手厚く祀られていることを知り胸が熱くなった。

この碑が建立されたのは平成八年だから、戦後五十年以上も経ってからである。どうしてそんなに遅くなったのだろうか。賢三はちょっと気になった。

人口は少なく、しかも、そんなに裕福ではない地域のことだ。建立の話は、もっと早い時期から持ち上がっていたものの、資金集めなどが思うようには捗らなかったので遅くなったのではなかろうか。

四

賢三が生まれ育った旧中筋村の平野という集落は、栗の木から車で二十分足らずのところにある。平野もかつては四十戸ほどの戸数を数えていたが、過疎化が進み、現在ではその半分近くに減っている。平野へつくと、賢三は実家へ立ち寄る前に生家の墓地へ向かった。

その墓地は、この地方で「お伊勢お宮」と呼ばれている小高い山の上にある。昔は伊勢神宮の流れをくむ神社か社が建っていたものと思われるが、現在は建物などは一切なく、ただこじんまりとした社叢がわずかにその名残を留めているに過ぎない。

道路は墓地まで開通しているので、車で行けないことはないが、かなりの坂道だし、しかも道路の両側から夏草が生い茂っている。そこで、賢三は坂道の手前の広場に車を停め、そこからは歩いて行くことにした。

兄の墓は、墓地の入口の一番目立つ位置にある。おそらく、跡取りの次兄夫婦が供えたのだろう。墓前には紫色や紅色の花をつけた背の高い葵の花が供えてあった。

命日に葵の花を供えることは、賢三が子どもの頃からやっていたことで、そのような古い慣わしが今でもこうして引き継がれていることを知り、賢三は昔懐かしく心の温まる思いがした。

杉田さんは、墓前に深々と頭を垂れて黙祷を捧げた後、墓石の裏側へ回り、裏面に刻んである碑文に読み入った。その間、賢三はすることがなく、墓地を囲ってあるブロック塀に上に頬杖を突き、見るともなく周囲の景色を眺めていた。

高台にあるこの墓地からの眺望はいい。眼下には、中筋川の河岸段丘上に発達した平野の集落や対岸の滝山などの集落が広がり、御在所山を主峰とする峰々がその背後に連なっている。

「いい眺めですねえ……」

碑文を読み終えた杉田さんがやって来て、賢三と同じように頬杖を突いた。

「しかし、お兄さんはどうして予科練を志願されたんでしょうね?」

このようなのどかな田舎で生まれ育った人間がどうして予科練などを志願する気になったのか。杉田さんは、どうもそんなこと考えているようだった。

「そうですね、これはお袋から聞いた話なんですが、とにかく、兄は幼い頃から飛行機が好きで、たまに飛んでくると食事中でも慌てて飛び出して空を見上げ、飛び去って見えなくなった後も、じっとその方向を眺めていたそうですよ。杉田さんはどうだったんですか」

「私の場合は、空への憧れというよりも、軍国少年としての気負いの方が強かったような気がしますね。何しろ私が生まれ育った福岡県の高田村というところは、戦艦大和を率いて出撃した第二艦隊司令長官の伊藤整一中将が出た地ですから、もともと尚武の気風の強い地域だったんです。現に、私の男兄弟は四人ですが、四人が四人とも軍人になっています。兄二人が陸軍、私と弟は予科練でしたけど」

「それで、戦死された方はいらっしゃらなかったんですか?」

「はい。幸いなことに、四人とも無事に帰ってきました」

「それはよかったですね。うちは兄だけでなく、兄が予科連を志願したことを知った二人の従弟がその後を追うようにして陸軍を志願し、二人とも戦死してしまいました」

「実は、私も友人につられて志願したんですよ」

「そうだったんですか」

「高等小学校を卒業した年の四月、私は三井三池染料工業所という会社に入社しました。十四歳のときで、今で言うと、中学二年生のときですね。そのとき、同期に入社した者が三名おりました。今でも覚えていますが、諸藤大輔君、富安正義君、山本茂君の三名でした。ところが、彼ら三人は二年後の昭和十六年に予科連を受験して合格し、五月一日に土浦海軍航空隊に入隊したんです。それを知って、私はおいてけぼりを食ったような気がして慌てましたね。彼らがお国のために命を捧げようと予科練を志願したのに、自分はのんびりと会社勤めなんかをしているわけにはいかん。そこで、私は勉強が苦手でならなかったんですが、一念発起して勉強に励み、その翌年の十七年に何とか予科練に合格したんです。後で、小学校の担任だった先生が、お前みたいなやつがよくも合格したもんだと言って感心していましたよ。何しろ、私の小学校の成績は、体操と音楽だけが甲で、ほかはみな乙でしたからね」

「それで、その三名の方はどうなったんですか?」

「三人とも戦死しました……」

「その方々はうちの兄貴と同期だったんですね、昭和十六年五月一日入隊の十六期生ですから」

「そうですね。私は十八期生でしたが、十六期生と十七期生は特に戦死者が多かったんです」

墓参を済ませた後、賢三は杉田さんと一緒に実家へ立ち寄った。墓参で帰省することは前もって連絡はしていたのだが、次兄夫婦は、松山の護国神社へ参拝に出かけていて留守だった。

次兄夫婦の代わりに、その息子の嫁が出て来た。彼女は田舎の女にしては垢抜けし、にこにこしながら気さくに応対した。

五

「もと来た道をひき返すのも芸がないですから、帰りは別のルートを通ってみませんか?」

「いいですね、お任せします」

「じゃあ、舟坂峠を越えて帰ることにしましょうか。山道なんで時間は少々余計にかかりますが」

「結構ですよ、私は山道を走るのが好きですから」

杉田さんも異存はなく、実家を出た賢三は来たときとは反対の方角へハンドルを切った。実は、杉田さんには明かさなかったが、賢三がわざわざ山道を選んだのには理由があった。

今から四十数年前の四月、大学を卒業した賢三は、それなりの理想を抱いて大洲市内のある高校へ赴任した。ところが、現実の職場は理想との隔たりが大きく、賢三は赴任

して早々に幻滅し孤立してしまった。そのため、賢三は同僚たちとも親しくなれず、日曜や祭日には郷里の平野へ帰り、それとなく、傷ついた心を癒していた。

そのとき、郷里への行き帰りに通っていたのがこの舟坂峠越えのルートで、当時は朝晩の二回、大洲・野村間の定期バスが走っていたので、そのバスを利用していた。

しかし、若い頃の苦い思い出は時間と共に浄化され懐かしくなるものだ。賢三は退職してからも何度となくこの峠道を通ったが、通る度に昔のほろ苦い思い出が蘇り、胸が締め付けられるような懐かしさを覚えていたのである。

しかし、今回この峠越えを選んだのはそのような懐かしさのためだけではなく、この静寂な峠越えは、墓参から帰りに通るのにはいかにもふさわしいと思ったからである。

くねくねと折れ曲がった上り坂を登り切ると、車は舟坂峠の頂上に着いた。ここで一服しましょうと、車を降りて振り返って見ると、はるか遠くに、平野の集落の家々と小さな帽子を被せたような「お伊勢お宮」のこんもりとした社叢が見えた。

峠から向こうは、木立に覆われ曲がりくねった急な下り坂が続く。道幅が狭く、対向車が来ると難渋しそうだが、幸いなことに対向車は一台も来ない。

しばらく走り、蔵川という集落を通り過ぎたところで、賢三は道路脇にある見晴らしのいい広場へ車を停めた。時計を見ると正午を大分過ぎていた。

「お腹が空きましたね、ここらで弁当にしましょう」

賢三らは車から降りた。そして、広場の先端に設置されている木製のベンチの上に並んで腰を下ろし、賢三は買ってきた弁当とお茶を分けた。

「それじゃ、遠慮なくいただきます」

几帳面な性格なのか、杉田さんはばら寿司の弁当の包装紙を丁寧に解いた。

賢三もばら寿司に箸をつけた。柚子の酢が利き、じゃこてんの具が入っているばら寿司は素朴な味がした。

「私はこの田舎風な味が好きでしてね。道の駅へ立ち寄ったときはいつも買っているんですよ」

「本当においしいですね」

杉田さんも黙々と箸を動かしていた。そして賢三が食べ終えるのとほぼ同時に杉田さんも食べ終えた。

せっかちなのか、賢三は家族の者も呆れるほど食べるのが早い。これは昔からのことで、古稀を控えた今でも変らない。ところが、賢三より十五歳も年上の杉田さんは、賢三にも劣らず飯が早い。

「杉田さんも早いんですねえ」

賢三が感心してそう言うと、杉田さんは、「そうなんですよ。びろうな話で恐縮ですが、海軍では早飯早糞といいましてね、飯を早く食べることと、トイレを早く済ますこ

とは、とても大事なことだったんですよ。ですから、この年齢になっても食うことだけは早いわけです。習い性となる、というやつですかね」と言って笑った。

賢三はさらにまき寿司も平らげたが、杉田さんは「こちらの方は、持って帰らせていただきます」と言って鞄に仕舞った。早飯食いの杉田さんも、分量の点では賢三にかなわなかったらしい。

一緒に物を食べたせいか、賢三は杉田さんに対してこれまでとは違った親しみを覚えた。それは杉田さんも同じだったようで、弁当を食べた後、杉田さんは時折ペットボトルのお茶を啜りながら問わず語りに身の上話を語り始めた。薫風が頬をかすめ、遠くで郭公の鳴声がこだましていた。

六

私は大正十四年、福岡県の三池郡高田村というところで生まれました。今の「みやま市高田町」に当たります。

高田村は自然豊かなところで、家の近くには小さな川や小高い山があり、子どもらは一日中、その川で魚をとったり山で罠をしかけて小鳥をとったりして遊び回っていました。私はその筆頭でして、夏休みなんかはろくに宿題もせず、朝から晩まで外で遊び回っていたもんですから、お袋から「お前の顔はどっちが表か裏かわからん」と言われるほど真っ黒に日焼けしていました。

親父は大牟田市の会社に勤めていた会社員で、片道八キロもある道のりを毎日歩いて通っていました。時間には極めて厳格な人間で、朝夕、いつも決まった時刻に決まった場所を通るものですから、道路沿いで農作業している人々は親父を時計代わりにしていたそうです。

親父は、私が悪さをして先生に叩かれたり、私のせいで学校へ呼び出されてお説教を受けたりしても、決して私を叱ったりすることはありませんでしたが、高等小学校を卒業するときにもらった通知表を見たときはさすがに、「こんな粗末な成績でどうするんだ」と言って叱られました。親父に叱られたのは、後にも先にもこれ一回だけでして、今にして思いますと、懐かしい思い出です。

予科練を志願したきっかけは、お墓でお話ししたとおり、友人に触発されたからでした。昭和十七年の五月一日、十七歳だった私は、乙種予科練の十八期生として土浦航空隊に入隊しました。

憧れの予科連ではありましたが、そこには厳しい教育と訓練、そして容赦ない罰直※が待っていました。私たちは歯を食いしばって耐えたものです。

土浦航空隊には十月末までいて、その間に、初飛行も体験し、操縦、偵察、射爆の適性検査も受けました。私は水上機の操縦を希望していたのですが、偵察の方に回されま

※軍隊用語で罰則のこと

した。そのときは不満に思いましたが、偵察だったから生き延びたわけで、もし操縦か射爆へ回されていたら、今の私はいなかったかも知れません。

十一月一日、私を含めた十八期の半分が三重空（三重航空隊）へ移動しました。そして、昭和十九年三月末に三重空での予科練の課程を修了しますと、高知空（高知航空隊）へ配属され、そこで飛練（飛行練習生）として本格的な飛行訓練を受けました。

そのとき、私と同じ分隊の同じ班には二十四名の班員がおりましたが、終戦までに七名が戦死、そのうちの四名は特攻攻撃による戦死でした。

九月三十日に飛練を卒業したあと、十二月一日から翌年一月三十一日まで、藤沢空（藤沢航空隊）で行なわれた電探（レーダー）の講習を受講し、講習を修了して高知空へ戻ってきますと、松山基地の三四三空（三四三航空隊）への転勤を命じられ、二十年二月六日に着任しました。

実施部隊（実戦部隊）である松山基地では、三人乗りの艦上偵察機「彩雲」に搭乗することになりました。「彩雲」は昭和十九年に制式採用された高速の偵察機で、追撃してきた敵機グラマンを振り切ったときに打電した「ワレニ追イ付クグラマン無シ」という電文は、彩雲の高速性を物語る逸話として知られています。

松山で三ヶ月ほど勤務した後、二十年の五月二十二日に、鹿児島県の鹿屋へ転勤になりました。鹿屋は海軍特攻隊の最前線基地でして、各地の航空隊から特攻機が集結し、ここから沖縄へ特攻攻撃をかけるのです。偵察の私は、沖縄方面へ進出してきた敵機動部隊の情況を偵察したり、特攻機の誘導や戦果確認などをやっていました。

鹿屋へ飛来した特攻隊員の中には、天候などの都合で何日間か逗留する者もおりましたが、飛来した翌日早朝に慌しく飛び立って行く者もおりました。彼らのほとんどは二十歳前後の若者で、中には十七歳の者もおりました。私は轟音を響かせて飛び立っていく彼らを見送りましたが、その轟音は彼らの号泣のように聞こえることもありました。

七

私は昭和十七年五月一日に予科練に入隊してから終戦までの三年三ヶ月、海軍に身をおきました。年齢で言うと十七歳から二十歳までで、まさに青春時代真っ只中でした。

その三年三ヶ月の間に、私は多くの人と出会い、そして別れました。しかも、その別れは永久の別れでした。戦後六十三年の歳月が流れましたが、私は今でも彼ら一人一人のことを鮮明に覚えています。

鳥取出身の島雄順次郎は、予科練から高知空の飛練までずっと同じ班で、苦楽を共にした仲でした。彼は高飛び込みや機械体操の名手で、予科練ではだんとつの技量を誇っ

ていました。また、彼は母親思いで、外出する度に郵便局から懐かしそうに電話をかけていたのを思い出します。まだ十七歳を迎えたばかりの若者でしたから、母親を恋しがるのも無理はありません。

彼は神雷部隊の隊員として出撃し、昭和二十年の三月二十一日、沖縄方面で戦死しました。神雷部隊というのは、人間が乗った「桜花」という特攻兵器を一式陸攻（陸上攻撃機）につるして沖縄まで運び、沖縄上空で投下する部隊のことです。

彼が高知空を離れるとき、私は後免駅で彼の手を握り、「島雄、次は俺が征くことになると思うが、絶対に死ぬなよ。お互いに長生きしようぜ」と言って見送りましたが、それが今生の別れとなりました。

また、高知空で同期だった有賀康男も忘れることのできない一人です。

あれは、私が鹿屋へ転勤してから一ヶ月ほど経った昭和二十年六月十九日の夕方のことでした。その日は出動することもなく、飛行服を着たまま兵舎でごろごろしていますと、誰かが、「高知空の白菊がやってきた」と知らせてきました。

「白菊」というのは練習機の名称です。練習機ですから、プロペラは木製、脚は出したままの固定脚、最大速度も時速二〇〇キロそこそこでしたが、その頃は飛行機が不足していましたので、この白菊に二五〇キロ爆弾を二個積んで特攻機に仕上げたのです。

当時、アメリカ海軍の主力戦闘機はグラマンで、グラマンの最大速度は時速六〇〇キロを越えていました。そんな高速のグラマンの大群が待ち構えているところへ突入するのですから、悲惨な結果は目にみえています。それでも、彼らは眦（まなじり）を決し、真一文字に突入していったのです。

話を戻しますが、私は高知空の「白菊」がやってきたということを聞き、誰か知り合いの者が乗っていないかと駆けつけました。すると、高知空で同期だった有賀がいたんです。その晩、久しぶりに再会した有賀と私は無断外泊をし、酒を酌み交わしながら一晩中語り明かしました。

そして、その翌日の夕方、私は今から沖縄へ出撃をする有賀の機の車輪止めを外してやりました。車輪止めを外すことは死出の旅路へ送り出すことです。つらい役目ではありましたが、私はこれが彼に対する友情の証であり、最後の餞（はなむけ）であると思って外してやったのです。すると有賀は、「ありがとうな、杉。そしたら先に征って待ってるよ」と、まるで訓練飛行にでも出かけるように莞爾として微笑み、軽く敬礼をしました。

そして、滑走路の端まで移動した「白菊」は轟音を響かせて離陸し、暮れなずむ南の空へ消えて行きました。あのときの有賀の顔とあの夕空の光景は、今でも忘れることが

できません。

あれは戦後二、三年経った頃のことでしたが、私は高知空の同期であった笠井と偶然会いました。話題は高知空の同期生たちのことで、やがて白菊特攻と有賀のことが話にのぼりました。そこで私が「その頃に俺は鹿屋にいて、有賀が鹿屋から出撃するとき、車輪止めを外してやったんだよ」と言いますと、彼は驚いて、「そうだったのか。実はお前が電探講習に行っている間に、航空本部から高知空に、若い搭乗員一名を実施部隊へ転勤させるようにという命令があり、人事担当だった伊藤大尉は、お前か有賀かのどちらかを転勤させるつもりでおったらしい。そこで、まず有賀にその旨を打診したところ、有賀は、自分はもう少し飛練で勉強してから実施部隊に出たいと言って辞退したので、お前が転勤することになったんだ。これは伊藤大尉から直接聞いた話だから間違いない」と言いました。

その話を聞いて、私は有賀との浅からぬ因縁を感じました。

私が松山の三四三空へ転勤して間もない頃、高知空では「白菊特攻隊」が編成され、特攻訓練が始まりました。ですから、もし有賀が転勤し、私が高知空に残っていたとしたら、私が白菊特攻の隊員として沖縄へ出撃することになっていたのかもしれないのです。

「もしかしたら、有賀は故意に私に転勤を譲ったのでなかろうか?」

私は、今でもふとそんなことを思ったりすることがあるんです。

また、同郷の戸嶋是義も、忘れられない一人です。彼は三重空での同期生でもありましたが、昭和二十年四月、松山基地で再会したのを最後に沖縄で戦死しました。松山基地で再会したときのことはよく覚えています。ある日、一式陸攻が着陸し戸嶋が降りてきました。よく見ますと、私の階級の一飛曹（一等飛行兵曹）より一つ上の階級の上飛曹（上等飛行兵曹）の階級章を付けていました。そこで私が「オイ」と声をかけますと、「コラ!、上飛曹に敬礼をせんか」と高飛車に出たものですから、私は「お前、誰の服を着とるんぞ」と言い返し、大笑いをしたものです。その翌日の早朝、飛行場へ行ってみましたが、彼の乗っていた一式陸攻は既に離陸していました。

戸嶋は絵が上手でした。それも玄人はだしの上手さでした。そこで、私は予科練を卒業するとき、記念に何か描いてくれないかとノートを差し出したところ、彼は竹の枝に止まっている雀の墨絵を描いてくれました。私は彼の器用な手付きとその見事な出来映えに舌を巻いたものです。そのノートは大事に仕舞っていましたが、鹿屋で戦後処理をしたとき、写真などと一緒に焼却してしまいました。私たち搭乗員、とりわけ特攻隊員だった者はアメリカ軍に捕

まるとひどい目に会うということでしたので、私たちは大慌てでその証拠隠滅を図ったのです。惜しいことをした、と今でも残念に思うことがあります。

以上、思いつくままに三名の名前を出しましたが、思い出に残っているのは、もちろん彼らだけではありません。

戦後、私は復員し、しばらくは郷里でぶらぶらしていましたが、いつまでもこんなことはしておられないと思い、予科練を志願するまで勤めていた三井三池染料工業所へ入社しました。

あれは昭和二十七年の夏のことでしたが、私は町中で出会った海軍時代の友人に誘われて、ある会に出かけました。その会は、旧海軍の飛行機乗りだった人たちが集まっている会で、何人かの懐かしい顔ぶれもいました。話は、昔の思い出話が主なものでしたが、その年に発足した海上警備隊のことも話題に上り、その警備隊で隊員を募集しているということを知りました。その話を聞いたとき、私は、「そうだ、自分も入隊しよう」と思いました。

海軍への郷愁、確かにそんな気持ちもありました。あれだけしごかれ、つらい思いをした海軍も、時が経つと懐かしく思われたんですね。不思議なもんです。

しかし、私が入隊を思い立ったのはただ単なる郷愁のせいだけではなく、若くして命を落した戦友たちのことを考えますと、自分だけがこのままのうのうと会社勤めなんかをしているわけにはいかないと思ったことも事実です。

その翌年の十月一日、私は海上自衛隊の前身である警備隊へ入隊しました。幹部と下士官のうち、九十%以上が私のような旧海軍出身者でした。

入隊したときは、GHQの指令で飛行訓練はまだ行なわれていませんでしたが、三十年からは飛行訓練が許可されましたので、私は大村航空隊で念願の飛行艇に乗りました。その後は、教官として計器飛行訓練や計器飛行の研究などを行ない、昭和五十年に五十歳で退官しました。

退官後は、ある大手企業の寮で寮の管理と新入社員たちの教育みたいなことをやっていまして、平成四年、六十七歳の時に引退しました。

八

ここで、杉田さんは一旦話を切った。感動的な話ではあったが、それらはすべて杉田さんの戦争体験に関わる話であって、家族の話は一切出なかった。その点、賢三は何かしら物足りないものを感じた、

何か言いにくい事情があるのかもしれない。賢三はそう思って尋ねることを遠慮していた。しかし、こちらは杉田さんを実家へまで案内し、実家のことを曝け出しているので、少々のことは聞いても失礼にはならないだろう。賢三はそう思ってさり気なく探りを入れた。

「それで、杉田さんの奥さんはお元気なんですか?」
「家内ですか、家内は八年前に死にました。腎臓を悪くして長年透析を行なっていたんですがね」
奥さんは八年前に他界していた。道理で、家族のことが話題に上らなかったはずだ。賢三は余計なことを聞いてしまったと思い、慌てて言葉を継ぎ足した。
「奥さんも九州のご出身だったんですか」
「いや、家内は松山の人間でした……」
そう前置きして、杉田さんは奥さんと出会った頃のことを語った。
「松山基地へ転勤した後、私はしばらく防空壕で寝起きをしていましたが、居心地が悪いので民家へ下宿することにしました。民家へ下宿することは、搭乗員の特権みたいなもので、ほとんどの者がそうしていたのです。そこで、私は飛行場周辺の民家を当たり、やっと一軒の民家を見つけました。そして、二日後から下宿させてもらう手筈を整えて帰隊しますと、鹿屋航空隊への転勤の知らせが待っていたんです。私はその足で民家へひき返し、『明後日鹿屋へ転勤することになりましたので、先程の話はなかったことにしてください』と言いました。すると、その話を聞いていた若い娘さんが出て来て、『鹿屋ですか?』と言って顔を曇らせました。彼女は鹿屋へ転勤することの意味を知っていたのでしょう。

その翌日の夕方、私はもう一度その家を訪ねました。特別な用事はなく、あの家族と娘さんにもう一度会っておきたいと思ったんです。
私は『明日鹿屋へ発ちます。短いご縁ではありましたが、大変お世話になりました』と家の人にお礼を述べた後、『私の郷里の住所は裏に書いてあります』と言って、私の飛行服姿の写真をその娘さんに渡しました。
すると、娘さんは受け取ったものかどうかと躊躇していたようでしたが、やがて黙ったまま写真を受け取り、そのお礼だと言って、自分で作ったという鉢巻を持ってきました。私は彼女の好意に感謝し、鹿屋ではいつもその鉢巻を締めて出撃していたものです。
それから三ヶ月ほどして戦争が終わり、私は生き残りました。鹿屋での残務処理を済ませ、郷里には八月の末頃に引き上げてきました。
信心深かった母親は私の生還を喜び、これも神仏のご加護のお蔭であると、あちこちの神社仏閣にお礼参りをしておりました。しかし、私には戦争が終わったと言う喜びや無事生還したという喜びはなく、無力感と脱力感に苛まれながら悶々とした日々を送っていました。そのような折、突然、彼女から手紙が届いたんです。内容は遠回しに私の安否を尋ねたもので、短い文面ではありましたが、彼女の心遣いが滲んでいました。

私は返事を書くべきかどうか迷いました。死ぬことを覚悟し、決別を告げて彼女のもとを去った者が、生きて再び彼女の前に姿を晒していいものか、と迷ったのです。あれこれと悩んだ挙句、私は返事を書きました。
彼女はてっきり私が戦死したものと思い込んでいたのでしょう。私が生きていたことを知って彼女は喜び、折り返し二通目の手紙が届きました。こうして二人の文通が始まったわけです」
文通、久しぶりに聞く懐かしい言葉だった。
「文通は二年半ほども続きました。ですから、その間に遣り取りした手紙の量は相当なものになります。よくもあんなに書いたものです。今でも保管していますが、あまり読み直してみようという気にはなれませんけど」
「二年半の文通の後、結婚されたわけですね」
「そうです、昭和二十三年一月のことでした」
「子どもさんは何人いらっしゃるんですか?」
「息子と娘がおりましたが、娘は四年前に死にました」
「えっ、娘さんも亡くなられたんですか?」
「はい、癌でしたけどね」
そうすると、杉田さんはこの八年の間に二人の肉親を亡くしたことになる。
若い頃ならまだ持ちこたえられるかも知れないが、人生も晩年に差し掛かっていた杉田さんにとって、奥さんと娘さんを亡くしたことは耐えがたい哀しみであり苦しみであったに違いない。ところが、二人のことを語る杉田さんの言葉や表情は淡々としていて、少しも蔭りを感じさせなかった。
もしかしたら、杉田さんにとって、二人の死は既に遠い過去のものになっているのだろうか。
いや、そんなことはあるまい。奥さんと娘さんが亡くなってからそれぞれ八年と四年の歳月しか経っておらず、八年とか四年という歳月では、人の死は風化するものではない。だとすると、杉田さんはどうしてあんなに淡々として二人のことを語ることができるのだろうか。賢三は気になったが、こちらからその理由を尋ねてみるわけにもいかなかった。
「それは大変なことでしたねえ。親にとっては、子に先立たれるほどつらいことはないといいますから」
賢三は結局、ありきたりのお悔やみしか言えなかった。
「娘まで亡くしたときは私も落ち込んでいましたが、いつまでもくよくよしていても仕方がないと思って諦めました。若い頃、私は死とすぐ隣り合わせのところにいまして、いやというほど戦友の死と向き合ってきましたから、死というものに対して鈍感というか淡白になっているのかもしれません……」
杉田さんはどこか遠いところを眺めるように視線を浮か

せた。

「先程もお話しましたように、私は多くの戦友の死と向き合ってきましたが、彼らの遺体を目にしてきたわけではありません。飛行機乗りの死は何も遺さない死ですから。従って、私にとりましては、彼ら飛行機乗りの死はあくまでも観念上の死なんですね。つまり、私の心の中では、彼らはただ死んだことになっているだけであって、本当に死んだのかどうかは確証がなく、彼らの死はまだ完結していないんです。戦後六十三年が過ぎても、彼らは生還していませんから、彼らが死んだということはほぼ確実な事実なんでしょうが、私は今でも、彼らの死をすんなりと受け容れることが出来ずにいるんですよ。その点、家内や娘の死は疑いようがなく、諦める以外に方法はありませんでした」

杉田さんにとって、奥さんと娘さんの死は完結した死であるのに対して、戦友の死はまだ完結していない未完の死であるということになるのだろう。

「でも、杉田さんは戦友たちの慰霊や墓参を続けておられますよね」

「はい。しかし、私は彼らを神や仏として畏敬するためというより、昔の懐かしい仲間に会いに行くかのような気持ちで出かけているんです。ですから、慰霊や墓参は苦にならず、長続きしているんでしょうね」

九

墓参から帰った後、賢三と杉田さんの仲は深まり、賢三はこれまで知っていなかった杉田さんのいろいろな側面を知ることとなった。その一つは戦没者の慰霊である。

杉田さんは精力的に慰霊を行なっていた。慰霊の内容は墓参、慰霊碑の参拝、慰霊祭への参列など様々で、その行動範囲も県内だけに止まらず、北海道、東京、高知方面などにまで及んでいる。

そのような慰霊行脚と同時に、杉田さんは戦争の生き証人として、自らの戦争体験を新聞・テレビや、地元の小・中・高校及び大学での講演などを通して次の世代へ語り継ぐ仕事も熱心に行なっている。

毎年、八月の終戦記念日の前後になると、杉田さんはあちこちから引っ張りだこで忙しくなる。賢三は、新聞で杉田さんの記事を読んだりテレビに出演している姿を見かけると、すぐその足で電話をして、「読みましたよ」とか「見ましたよ」と言って伝えた。知り合いがマスコミに登場すると、こちらも嬉しくなるものだ。

すると杉田さんは「いやあ、お恥ずかしいことで」と謙遜しながらも、「この年になっても、こうして元気で多少なりとも人様のお役に立てるようなことができるのはありがたいことです」と付け加えた。

戦争体験者の話というのは、ともすれば悲壮になり過ぎたり、逆に勇壮になり過ぎることがあるが、杉田さんはそういうことはない。彼は自らが体験したありのままの事実を柔和な表情を浮かべながら淡々と語っていく。また、それがどんなに悲しくつらい場面の話であっても、決して感情を顕わにすることがない。

そして、話の締め括りとして、杉田さんは必ず平和の大切さを説く。平和でないと、人間は何もできないのだとこんこんと説く。それは、あたら才能を戦争によって開花させることのできなかった幾多の戦友たちの遺恨を体した杉田さんの心の底からの叫びのように聞こえる。

そのような話の内容もさることながら、杉田さんのけれんみのない語り口は聞き手の心に響く。

それは、杉田さんの生来の資質によるもので、余人が真似をしようにも真似のできるものではない。賢三はいつもそう思いながら聞いている。

これらの活動の外に、杉田さんは「掩体壕」の保存運動も行なっている。

掩体壕というのは、蒲鉾型をしたコンクリート製の建造物で、軍用機を格納するために作られたものである。戦時中、松山航空隊には六十数基あったそうだが、現在では南吉田町に三基しか残っておらず、杉田さんは、その掩体壕を戦争遺跡として市で保存をしてもらうよう、働きかけていたのである。

かつて松山航空隊で勤務し、これらの掩体壕へ飛行機を出し入れをしたり、この掩体壕を出て出撃していく幾多の僚機を見送った杉田さんにとって、掩体壕は忘れることのできないモニュメントでもあったのだろう。

「掩体壕は、嫁も子もなく、何も残さずに散華した若い飛行気乗りたちを偲ぶよすがであり、彼らの墓標でもあるのです」

杉田さんは、いつもそう言って周囲の人たちを説得していた。そのうちの一基を、賢三は杉田さんの案内で見学させてもらったことがある。

その掩体壕はある会社の事務所として使われていた。そのため、内部は間仕切りや塗装がしてあったが、一番奥の壁面には、戦闘機「紫電改」と偵察機「彩雲」の写真と淡い桜の花の油絵が掛けられ、その傍らには小さな仏像が安置されていた。これは、この会社の社長さんのお計らいによるもので「紫電改」と「彩雲」はこの掩体壕から飛び立った飛行機であり、桜の花は日本人が最も好きな花だからということだった。

社長さんからその話を伺ったとき、賢三は、掩体壕は単なる戦争遺跡ではなく、杉田さんが言っていたように、ここから飛び立って帰ることのなかった若者達の鎮魂の碑であり、墓標でもあると思ったのだった。

昨年の平成二十七年、杉田さんの長年にわたる念願が実

を結び、掩体壕は市で保存されることになった。
ここまで来るには長い道のりと時間が必要で、杉田さんの苦労もひとしおのものがあった。賢三も何年か前、地元の新聞に投書をし、微力ながら、杉田さんの活動を後押ししたことがあった。
市役所や市議会議員の有力者に頼めば、あるいは、もっと早く実現していたかもしれない。
杉田さんにもそういう伝手がないわけではなかったが、杉田さんには、彼らに頼み込んでどうこうしようという気持ちは端からなく、彼は地道な署名集めや講演会活動などを通して訴え続けてきたのである。
「何しろ、ほとんどが戦後生まれでしたからねえ」
杉田さんは、よくそう言ってこぼしていた。市役所や市会議員のところへ陳情に行っても、彼らのほとんどが戦後生まれで、なかなか埒が明かなかったという意味である。
戦争の辛酸をなめてきた杉田さんにとって、戦争のことをほとんど知らない彼らの応対は、時に、歯がゆく思うこともあったのだろう。

十

昨年の六月十九日のこと、賢三は再び杉田さんと連れ立って兄の墓参りに行った。今回も、杉田さんからの申し入れによるものだった。
前回の墓参から七年が経過し、あのとき八十三歳だった杉田さんは卒寿を迎えていた。しかし、杉田さんは七年前とあまり変りがなく、元気な足取りで墓地までの坂道を登った。
「前回お参りに来たときも、確か葵の花が供えてあったように思いますが……」
「そうですね。昔、私たちが住んでいた家の庭先には葵が植わっていまして、兄の命日の頃にはいつも満開になるので、こうして供えるのがしきたりみたいになっているんですよ」
「あれから七年になりますかね……。年をとりますと、時間の経つのが早くなり、一年一年が飛ぶように過ぎ去ってしまいます」
「私もそうですよ。これは以前、誰かから聞いた話なんですが、例えば十歳の子どもにとっての一年間は、これまで生きてきた時間の十分の一になりますが、八十歳の人間に取っての一年間は八十分の一にしかなりません。だから、年を取ると時間が早く経つように感じるのだ、と」
「なるほど、そういうことなんですかねえ……」
墓参を済ませ、車に乗り込んで発とうとしたときのことだった。
「実は、これをお見せしようと思って持ってきていたんです」

杉田さんは鞄の中から一枚の写真を取り出した。
「以前、一度お話したことがあったかと思いますが、この写真は私が松山航空隊から鹿屋へ転勤するときに、家内に渡した写真です。当時は、まだ結婚していませんでしたので家内ではありませんでしたけど」
「ああ、あのお話ですか、あのお話はよく覚えていますよ、とても感動的なお話でしたから」
賢三はセピア色に染まった写真を受け取った。手の平に乗るくらいのその写真には、飛行服に身を包んだ若者が写っていた。色白で面長の整った顔は彫りが深く、しっかりと結んだ口元には強固な意志がみなぎっている。
「これが杉田さんですか？」
「そうです、二十歳頃の写真です」
「凛々しいですね」
「はあ、かつて女子高校に招かれてお話をしたとき、この写真を大写ししたことがあるんですが、彼女らにも喝采を受けました」
まさか、この男ぶりを自慢するために見せたのではなかっただろうが、杉田さんも、満更でもないようだった。
「そうでしょうね、今時の若者の中にはこんな凛々しい顔つきをした若者はそういませんからね。ただハンサムな若者ならたくさんいますけど」
「裏に、私の郷里の住所が書いてあります」
促されて裏面を見ると、そこには肉太の文字で「福岡縣三池郡高田村上楠目　杉田慎司」と書いてあった。もとは青インクで書かれていたのだろうが、長い間に変色し黒ずんでいた。
「死ぬことを覚悟した者が、どうして郷里の住所なんかを書いたりしたのか、今でもよく分からないんですよ」
「杉田さんは、彼女に自分のすべてを伝えておきたかったんじゃないんですか？」
「そうでしょうか……・」
「つまり、この写真を渡したことは杉田さんの愛の告白でもあったわけですよ」
「いや、そういうことではありません」
賢三はここぞとばかりに自信を込めて言ったが、いとも簡単に否定された。
「当時、私たち飛行機乗りの間には、明日をも知れぬ飛行機乗りは女を好きになってはならないという暗黙の掟があり、私も飛行機乗りの矜持として、そのことを強く自覚していましたから」
「じゃあ、愛の告白でなかったとしたら、何だったんでしょうか？」
賢三はなおも食い下がった。
「そうですねえ……」
杉田さんは口篭もった

「こんなことを申しあげるのは大変恥ずかしいことですので、実は家内にも言ったことはなかったんですが、この際思い切って申し上げることにしましょう」

杉田さんは溜息とも深呼吸ともつかぬ息をして、こう語った。

「写真を渡すとき、私は口には出せませんでしたが、心の中で、『明朝鹿屋へ発つ私は、そう遠からぬうちに死ぬことになるでしょう。そこで、大変不躾なお願いがあるのですが、もし私が死にましたら、杉田慎司という男がこの世に生きていたということを、あなたのその清らかな心の片隅に留めておいてもらうわけにはいかないでしょうか』という願いを込めて渡したのでした。

すると、彼女は何も言わず、私の顔をじっと見詰めながらその写真を受け取ってくれました。その表情を見て、私は彼女が私の願いを聞き入れてくれたのだと思いました。

これで、たとえ自分は死んでも彼女の清らかな心の中に生きている。そう思いますと、私はすっかり気が楽になり、いつ死んでも立派に死ねそうな気になったのです。

その晩、隊へ帰った私は、薄暗がりの中で転勤の荷物を整理しながら海軍へ入隊して初めて泣きました」

十一

今年も杉田さんは忙しそうである。

先日もちょっとお聞きしたいことがあって電話をしたら留守だった。そこで、夕方の七時過ぎに電話をしたらやっと繋がった。

「実は、今日は高知の白菊特攻隊の慰霊祭へ行っていたんですよ」

「車を運転して行かれたんですか？」

「そうです、高速を走れば二時間足らずで行けますから」

「大丈夫なんですか？」

「はい、大丈夫です」

九十一歳の杉田さんの声は自信に溢れていた。

「以前は、高知空の同期生や先輩・後輩が大勢集まって、毎年盛大な慰霊祭を行なっていたのですが、参列者の数は年々減ってまいりまして、昨年と一昨年は、私を含めてたったの三人でしたが、今年はとうとう私一人になっていました」

「さびしいですね……」

「仕方がありません。戦後七十一年、旧海軍の飛行機乗りだった者の多くは既にこの世になく、生きている者も、高齢のためほとんど身動きが取れなくなっていますから」

「来年はどうされるおつもりなんですか？」

「身体が動く限り行こうと思っています」

「杉田さんお一人であってもですか？」

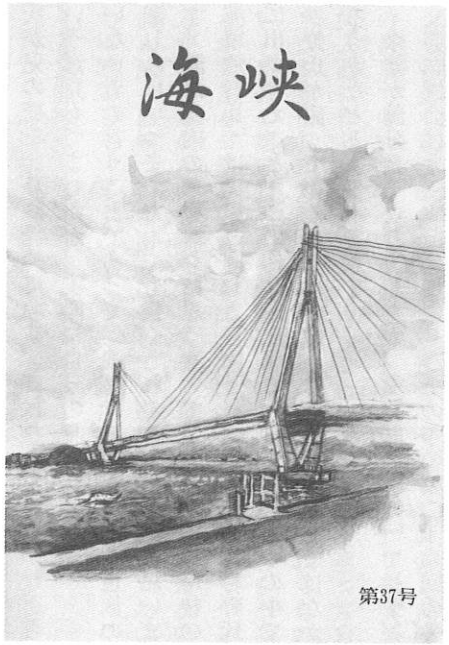
「はい、私があの世とやらへ行って彼らと再会したとき、

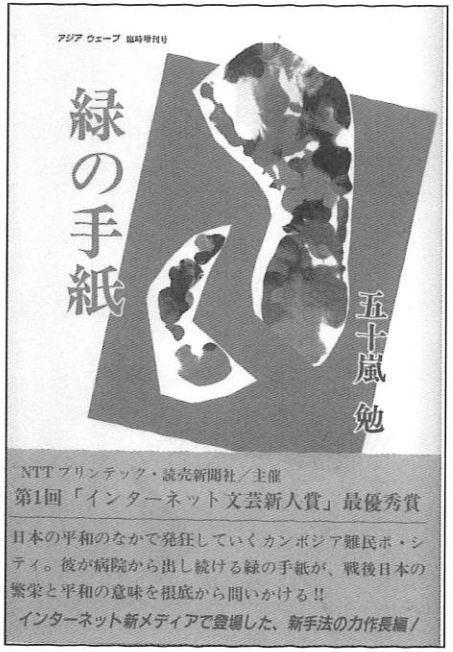
お前は俺たちの何倍も長生きしていながら、一体、何をやっとったんだと言われることのないよう、彼らの慰霊をしっかり行ないながら、彼らのことや戦争のことを後世に語り伝えたいと思っています。それが彼らに対する供養であり、生き残った私の努めでもあると思っていますから」

予科練出身の杉田慎司一飛曹は最後の海軍飛行兵として、これからも一人で戦友たちの慰霊に努め、彼らのことを語り続けていくだろう。そして、杉田一飛曹が幽明境を異にするとき、彼の戦友たちの死もまた完結する。

（「海峡」37号より転載）

西山慶尚
にしやま　よしひさ
1940　愛媛県西予市野村町（旧東宇和郡中筋村）に生まれる
65　東京教育大学理学部卒
その後、愛媛県内の公立高等学校等に勤務
2001　定年退職
1999年より文芸同人誌「海峡」に参加し、現在まで小説を発表する
愛媛県在住





五十嵐勉「緑の手紙」1700円
注文はアジア文化社まで

海峡

愛媛県

自分の言葉で書いていく

高齢でも書く意欲は盛ん

愛媛といえばすぐに正岡子規が浮かび、俳句県とおもわれている県民性の中で俳句以外の文学をと、先輩の熱い心で、西瀬戸道（しまなみ海道）の始発点であり終点の地でタオルと造船の町に平成九年に誕生したのが、文芸同人誌「海峡」です。今愛媛は全国の高校生の「俳句甲子園」や正岡子規生誕百五十年で熱くなっています。

私がこのような県民性の中で誕生した同人誌「海峡」を引き継ぎ、何も知らないままに十三年が過ぎてしまいました。その間に同人の入れ替わりや経費のやりくりに頭を抱えてきましたが、同人たちの支えがあって今日まで続いてきました。会員もすでに高齢化して平均年齢が七十歳を越えています。年二回の発行には必ず作品を発表するということをモットーにしてきました。同人誌としてはまだまだ未熟ですが、作品に対しての気概は決して他には負けない気持ちを各自持っています。

そんな文芸誌「海峡」で本誌の優秀作品に「海峡」33号の多嶋海彦氏の「花ことば」に続き、この度37号の西山慶尚氏の「最後の海軍飛行兵」が選ばれましたことは大変名誉なことと喜んでいます。西山慶尚氏にとってこの賞は海峡」20号の「知覧―六月三日の邂逅―」と二作品目です。

西山氏は四才くらいのときに実兄を予科練で亡くしたと聞いています。その時はまだ何も分からない幼子でしたが長じて兄の無念の死が納得できていないのだと思います。西山氏は「知覧―六月三日の邂逅―」「最後の海軍飛行兵」の他に「最後の帰郷」「六本目の柱」などと戦争ものを書いてきていますが、彼が戦争ものを書く本当の理由は兄の死が完結できていないからなのではないでしょうか。海軍飛行兵の死体は誰も確認できていないのですから。多くの海軍飛行兵と同じように死体なき死なのです。

この作品を発表した「海峡」37号の後の合評会では西山氏が兄の死を誇りに思っているのではないだろうかなどという意見もでましたが、実際に自分の身内にそういう人がいない者の言うことであって、戦争で肉親を失った遺族の悲しみはいつまでたっても癒やされることはないと思います。誰が身内の死を誇りに思うものでしょうか。「最後の海軍飛行兵」は実兄と同じように予科練に志願した杉野氏に出会ったことでこの作品が出来ていますが、文中の中で杉野氏が語っていることは、或いは西山氏の本心ではなかろうかなどと想像もされます。

余談が随分長くなりましたが、文芸誌「海峡」では愛媛文芸誌協会にも二年前に加盟し、その年の第二十六回の愛媛同人誌協会賞第1部門賞を「海峡」34号の中から西山慶尚氏の「祖父の遺産」が、翌年の二十七回協会賞第1部門には「海峡」36号の藤井総子氏の「帰省」がそれぞれこの賞をいただきました。この愛媛同人誌協会に入会して連続して愛媛同人誌協会賞第1部門賞をいただいたことはマンネリ化していた同人たちに刺激となりました。さて今年も「海峡」の中からいただけたらと欲を出しています。海峡が三年連続でこの賞をいただいたら神様に感謝しなくてはと密かな期待をしています。

そして今回の西山氏のこの文芸思潮の優秀作品に選ばれた快挙に同人はじめ皆の喜びはいうまでもありません。

文芸誌「海峡」では年二回の発行と同時に合評会を行っていますが、お互い辛辣な意見交換となり司会者もたじたじとなります。がその後は慰労会として食事会をしています。その時は先ほどまでの唾の飛ばし合いは何だったろうかと思うほど和やかな雰囲気で次回の作品への意欲を与えてくれています。

文芸誌「海峡」では同人誌以外にミニ新聞（海峡だより）を二か月に一度発行しています。会員の皆にお知らせする事項と交代で八百字随想を書いています。第十一回文芸思潮優秀作品に選ばれたこともこの海峡だよりで皆に知らせました。

海峡は会員数こそ十五名くらいと少ないですが高齢になっても書く意欲は全員持っています。へたでもいい、自分の言葉で書いていくことをモットーとしています。そして同人誌に作品を発表するということは、商業誌と違って自らがお金を払って読者に提供することですが、それでもいい、自分の書いたものを自分以外のひとに読んでもらうことができる。最小限度でも同人だけにでも読んでもらうことができるのが同人誌です。あまり光のあたることのない同人誌「海峡」に今回もこうして光を与えてくださったことに感謝しています。

（藤井総子）

「海峡」同人会

海峡
〒799－1522
愛媛県今治市桜井4・2・18藤井総子方
☎0898・47・3699

同人雑誌優秀作

星灯 3号

サクラサクサク

たいらい さとし

兄は自衛官で半年前に死んだ。中東のどこかで死んだ。どこかは知らされていない。特定秘密で、教えられないと自衛隊駐屯地の担当官だかに母が言われたそうだ。詳しくは母も言いたがらない。このことをあんまりしゃべると逮捕されると思っているみたいだ。もっとも知らないだけ、というのもあるかもしれないけれど。兄の遺体は返ってきていない。〝取り戻せない地域〟にあるらしい。詳しくはわからない。ただ母が、お墓に入れるために、何か遺品はないのか、と食い下がったくらい。結果、クロネコヤマトから、二十センチ四方の小包が後日、届いた。開けると中には、手のひらに乗るくらいの平たい石ころが一つ入っていた。走り書きのように雑に書かれたメモが一枚入っていて『現地の石』とだけ記されていた。でも、どう見ても、その辺の河原にありそうな石だった。

母はその石ころを、狭い居間にある戸棚の中に、ハンカチを敷いて置き、毎朝、毎晩、手を合わせている。そうすれば兄がふらっと帰ってくるとでもいうように。

八両編成の黄色い電車の窓の外には、広大な自衛隊の駐屯地が広がっていて、僕はバイトに行く時、いつもこうして兄のことを考えてしまう。鬱々とした気分が胸の奥に巣食っていて、カビが広がるように、苦味のある感情を帯びて広がる。だから、なるべく電車の中ではマンガを読んだり、イヤホンをして音楽を聴いたりしてやり過ごすことにしている。死んだ兄のことなど考えて、いったい何になる

っていうんだ。

本当のところ、こうやって外出もしたくないし、バイトにも行きたくない。でも母一人の収入では暮らしてゆくのが厳しく、僕は安心してひきこもることもできない。貧乏だと引きこもることすらできないなんて、理不尽な世の中だと思う。だいたい、兄が生きていれば、僕だって普通に自衛隊に入って、そこそこの収入を得て自立して生きていけたはずなのに。

兄の死は特定秘密だけれど、この辺じゃ有名な話だった。地元の高校の卒業生の半分近くが自衛隊に入るのに、僕の代の卒業生は例年の「五分の二」ほど。そりゃ、誰だって、この辺で適当な演習をして、来るはずのないぬるい戦争に備えて訓練していればお金がもらえるから入隊するんだ。本物の戦争に行けだなんて、冗談じゃない。

電車は三十分ほど走り、そこそこ大きな駅についた、四つほどの路線が乗り入れている、この辺の中核駅だ。僕のバイト先は、この先の雑居ビル。業務内容を簡単にいえば「データ入力」だ。

『服装自由、髪型自由、ヒゲ、金髪、ピアスOK。時給1000円以上可能。自由出勤。ノルマなど一切ありません。簡単なデータ入力だけ。音楽聞きながら楽々稼げますよ』という甘い文言に惹かれた。残念なのは、僕にはヒゲも金髪もピアスも、モード的なファッションもないこと。人と極力接したくなかっただけだ。

ビルの一階は、コンタクトレンズの販売事務所。二階が清掃業者の事務所。三階が潰れたイメクラ店で、バイト事務所はその上の四階だった。定員六人と表記されたエレベーターは、どうやっても大人四人が乗ったらいっぱいで、この狭さと他人との距離の近さが嫌で、僕はいつも階段を使う。

団地のドアみたいに愛想のない灰色の扉を開ける。中は熱気でむあっとしていた。入ってすぐ左のドアを押し開けると、さらにむあっとする。十五畳ほどの広さの部屋に、長机がギリギリ通路を残すくらいの間隔で並べられ、そこにはもれなくデスクトップパソコンがぎっしり置かれていた。

一応禁煙で、タバコを吸っている人間は一人もいないのに、いつも部屋はタバコ臭い。

パソコンの半分ほどは空いていて、残りの半分には、若い男が座って、みな一様に耳にイヤホンを入れ音楽を聞きながら、キーボードを叩いていた。茶髪や金髪頭がそろっていて、ダメージ加工のデニムや、ロエンのスカル柄のTシャツやスワロフスキークリスタルをちりばめたスカル柄のパーカーなどの格好をした、いかにもなメンツが目白押しだった。こういう人種はなぜかガイコツ柄が好きで、僕にはさっぱり理解できないし、あんなTシャツに一万円近

く払う感覚もよくわからない。

ほぼ全身をGUで固めた（黒のPコート、白のタートルネック、黒のスキニーパンツ、グレーのデザートブーツ）コーディネートの僕とはちょっと違う。パソコンには、それぞれ一番から四十番まで番号が振られていて、僕は「十四番」のパソコンに座った。液晶画面のまわりには、びっしりと、注意書きの書かれたメモ用紙が貼られている。僕の貼ったものもあるし、このパソコンを使う他のバイトの書いたものもある。書ききれない分は、引き継ぎノートに書き込まれている。僕の右隣り、十三番には、金髪頭で左耳だけやったためたらとピアスを打ち込んでいる、きっと同年代であろう男。左隣りの十五番には、スカル柄のニット帽を目深にかぶったアゴ髭だけを三十センチも伸ばしている若い男。それぞれ、耳にイヤホンをぶちこんで、無表情にキーボードを叩いている。

僕も肘置きのないデスクチェアーに座り、その仲間に入る。青いナイロン製の座席部の手前のほうは、茶色に変色していて汚らしい。

電源を入れて、起動させるまでの間、引き継ぎノートに目を通す。大した変化はない。メインは五人で、あとは出たり入ったりだ。一応、メインの人数が増えるほど時給は上がることになっているそうだが、面倒くさい作業が増えるのも確かで、それと上がった雀の涙ほどの時給を天秤にかけると、別に増えてほしくもなかった。

『夜勤ごくろうさま。まだ寝ているかな？　俺は今、九州方面へ向かっています。つらいけど、がんばります！』

こんなメールがきていた。これは四十五歳の独身男、ユーザー登録名は『熊野ヨシオ』という、長距離トラックドライバーだった。

『ようやく起きました(^^)!　運転お疲れさまですっ。九州ですか。私は行ったことがないので、どんなところへ行くのか、興味あります。福岡とかですか？』というメールを返しておく。

熊野に対する僕は「彼氏いない歴十年の看護師副主任、愛子。子どもは欲しいので、次の彼氏は結婚相手と考えている堀北真希似の三十四歳」という設定になっている。三十四歳なのに堀北真希似というのが、いい加減すぎる設定でちょっと笑える。役割としては、熊野にメールをせっせと送らせて、ポイントを稼ぐこと。熊野は、一ポイント十円で、ポイントを購入する。ベテラン看護師愛子にメールを送るのに一通十ポイント（百円）。愛子から送られたメールを開くのに五ポイント（五十円）。写真付きメールの場合、送るのに十五ポイント（百五十円）。送られた写真付きメールを開くのに十ポイント（百円）。自分のメールアドレスを送るのに二百ポイント（二千円）。送られたメールアドレスを開くのに五百ポイント（五千円）。こんな感じで、メールのやりとりには、細かいポイント設定がしてあり、何をするのにもポイントを消費する。

最近は、みんなスマホだから、アドレスといっても、Gメールアドレス等なので、こちら側としては、なんの問題もなく作業できる。一昔前は、携帯電話のアドレスを装う必要があったそうで、ちょっと面倒だったようだ。そんなことをここの胡散臭い社員連中が話していた。社員といっても、僕の右隣りの男が少し歳を取ったくらいで、とてもまともな人間には見えないのだけれど。

トラックドライバー熊野からはすぐに返信はなく、僕は、別の四人にメールを打つ。設定が分かれているので、少し気をつけないといけない。四人のうち、一人には、熊野と同じ三十四歳の看護師愛子という設定になっている。別の一人には、二十八歳の結婚願望の強い保育士、沙世（さよ）。残りの二人には、忙しすぎて彼氏を作る暇のない二十五歳の外資系OL朋美（ともみ）、という設定でやりとりをしている。

それぞれ、出張や研修やらなんやかやと、メールを返せない時間帯や時期が存在していて、つまりそれは、こちら側のシフトの問題につながる。それぞれに、適当なメールを送って、返信を呼び込む。前回のやりとりの履歴も残っているから、展開のつながりを不自然にしないようにするので、わりと時間がかかる。それだけで三十分はかかってしまった。

ほかにもサイトの掲示板に複数の「エサ」をまくのも仕事の一つだ。指定サイトから女性の顔写真を持ってきて貼り付け、適当な名前、年齢、職業などを打ち込み、メッセージを載せてアップする。よく露骨に女性の半裸の写真をプロフィールに使い「割り切り」や「大人の関係」など、露骨に性的な文言のメッセージを載せる同業者もいるが、ここのサイトは、あくまで真面目な交際が目的で、アダルト系とは一線を画している。ま、サクラ系の業者という点では同じ土俵ではあるけれど。

興味を持った男性会員がいて連絡がくれば、やりとりがスタート。ポイントを限界まで引き出す。これの繰り返しだった。ただ最近は、なかなか餌の食い付きが悪い。百パーセントに近い男のサクラが女性ユーザーを装っている、などの例を挙げられて摘発された業者がいたりと、ちょいちょいニュースになっているからだ。元々が胡散臭いのに、そんなニュースまで流されたら誰だって利用をためらう。最初に付与される無料の百ポイント分だけ遊んでゆく会員も多い。どう引き込むかは、こちらの腕次第で、それが仕事だった。

餌に食いついてきた男が何人かいた、その中の一人のメールが僕の気を引いた。

『こんにちは。僕も一人暮らしで寂しいです。奈緒（な

お）さんも大切な人を亡くしてしまったのですね。僕もです。僕には兄がいましたが、死にました。仲がよかったんですが……』

およそ、出会い系サイトのメール内容とは遠い文面。この男がメールを送ったこちら側の設定を見てみる。名前は、奈緒、二十二歳、きゃりーぱみゅぱみゅ似。女子大を中退して留学。留学先で知り合った男と婚約するが事故で婚約者を失い、失意の帰国。心の傷を埋めきれぬままフリーターとしてバイトに明け暮れながら、寂しく独り暮らしをしている。という、なんとも笑っちゃうようないい加減でいかにもな設定だ。ちなみに僕が考えた。でも、引っかかる男がいるのだから、我ながら感心してしまう。

男のプロフィールに目を通す。中村トオル、二十二歳、フリーター、一人暮らし、体型はぽっちゃり型（この場合、だいたい超デブ）、趣味はゲームと昼寝。まったく興味の持てない内容だ。さっそく返信する。

『私のプロフに興味を持ってくれてありがとう(*^_^*) こういうサイトってよくわからないのだけど、お話し相手になってくれるような優しい人に出会えたらなって、勇気を出して登録しちゃいました。トオルさんとは同い年ですね。落ち込みやすい私ですけど、ぜひ仲良くしてくださいね』

婚約者が死んでしまった失意の二十二歳にしては軽いかな、という気もするけど、こんなサイトに登録する二十二歳にしては、重いか、などとくだらないことを思ってしまう。

ほかの餌に食いついた会員にも返信をしていると、すぐに中村トオル（偽名にしては酷すぎる）から、返信がきた。

『こちらこそ、仲良くしてください。僕の兄は三つ年上で、とても尊敬していました。内緒ですけど、自衛隊のエリートでした。でも、海外派兵先で殺されたそうです。あ、暗い話でしたね……。奈緒さんは、何系のバイトしているんですか？』

文面を確認して、思わず左右を見回してしまった。誰かのいたずらかと思った。だって、三歳年上の自衛隊員で海外派兵先で戦死って、僕と同じ状況だったから。

もう一度、周囲の金髪頭を眺めまわし、思いなおす。そんなわけないか。誰も、僕の素性を知らないし、僕だって、連中の軽薄で空っぽの見た目以上のことは知らないわけだから。奈緒の設定は何系のバイトかまでかは考えてなかった。何がいいのかね。大学中退の帰国子女がしそうなバイトで、そこそこ稼げそうなのは……何にも思いつかない。好感度が高い隙のある女子は、ダブルワークがいいか。

『昼間は派遣の事務をしています。それで軽蔑されちゃうかもしれないけれど、事務だけじゃ暮らせないので、夜ときどきスナックのバイトもしています。本当はしたくないのだけれど、暮らせないので。トオルさんは、いつも何をしていますか？』

とにかく、メールをし続けないとポイントが消費できないので、まめに質問をして会話のキャッチボールを成立させないとならない。返信がきたら、すぐ返信。バイト中は、ものすごい勢いでメールを返す。

『ぜんぜん軽蔑なんかしませんよ。偉いです。僕なんか、働きもしないで、それどころか家からもほとんど出ない生活なので、見習いたいです』

『私なんて全然ですよ。トオルさんは、やりたいこととかないんですか？』

トオルもよほど暇なのか、すぐにメールを返してくる。

『特にこんな仕事をしたいとかはないんですけど、誰かの役に立つことはしたいと思っています。思っているだけで、ほんと情けないんですけど。ほんと、僕って、なんで生きているのかもよくわからないんですよ。すいません、こんなこと書いて、ひきますよね。でも、本当なんです。兄はとっても優秀でみんなから期待されて、それなのに死んじゃって。僕なんか、こんな引きこもりで、僕が代わりに死ねばよかったって、みんな思っていますよ』

大の大人が、引きこもって悶々としてると、ろくなことを考えないな。ニートらしい甘ったれた考えだ。こんな甘ったるい沼にいつまでもハマっていられるのは、贅沢だ。でも僕だって、引きこもっていたら、兄を思ってメランコリックな考えになり、ゲームの合間にこんなことを考えるかもしれない。慰めるメールなんて送りたくなかった。たとえ嘘でも。

『急に仕事の呼び出しが入っちゃいました。ごめんなさい。ちょっと行って来ますね』

この日、僕はトオルとメールするのをやめた。そんな気分になれなかった。

アパートに帰ると、母が兄の荷物を整理していた。片付けるというレベルではないくらい、兄の服も本も大事にしていた野球のグラブやバットも何もかもを出しているので、どうするのか聞くと、狭い部屋だし、もう処分する、と言う。形見の石があるから母さんはもう大丈夫だから、と。ちょっと待ってよ、と言いかけた言葉は、尻切れトンボではっきりとは声に出せなかった。あんな適当な石ころを後生大事にして、兄の愛用していた身の回りの物を捨てるなんて、冗談じゃなかった。でも、母が何かを決めて立ち直ろうとしているのを壊してしまいたくもなかった。だから僕は、高校まで野球部だった兄の外野用グラブと軟式球を持って家を出た。

一階の角部屋が僕らの住まいだ。アパートの横の壁に沿ってコンクリートブロックの壁がもう一枚ある。大家のおじさんが兄のために作ってくれた壁だ。野球好きな人の良

いおじさんで、兄のために企業クラブチームを探してもくれたが、兄のレベルでは入部できなかった。

僕は野球部ではなかったけれど、兄とキャッチボールはしていたので、初歩的なことはできる。ブロック塀に向かって投げる。かなり強く投げないと、土の地面に勢いを殺され、戻ってこない。隣の大家の家との境は何もなく、そのまま向こうの庭につながっている。

何に憤っているのかわからないが、だんだんと投げる強さの加減が利かなくなり、汗をかいていた。トオルのことにだ、と気付いたとき、投げつけた一球は、ブロック塀のてっぺん付近の角に当たり、大家の家の庭のほうへ飛んでいった。

拾いにいこうと庭のほうに向かいかけて、やめた。荒れ放題、伸び放題の庭と、無人の廃屋に恐ろしくなってしまった。兄の死ぬ一年前に、大家のおじさんは心筋梗塞で死んだ。兄は葬儀に参列したがったけれど、親族だけでやったみたいだった。おばさんは認知症が進み、息子夫婦の手で施設に入れられた。おばさんが家を出る日、兄は挨拶をしに行こうとしたけれど、息子夫婦に拒まれた。きっと生きていたら、兄の死を悲しんだはずだ。兄は、みんなに悼まれる存在だった。

僕？　僕はいったい何をしてるんだろう。くだらない出会い系サクラのバイトの毎日で、兄の存在を次第に忘れようとしている。兄の大事なものまで捨てられようとしている。トオルの奴は、自分の兄のことを考えるだけ考えて浸っていられるのに、同じような存在の僕は、引きこもることすら許されない。あんなクズみたいな連中相手にポイントを稼ぐことに時間を費やしている。バカみたいだ。実際、僕は賢いほうじゃない。チャラチャラした外見のバイトの同僚を見下してもいたが、彼らのほうが人間として下とは到底言いきれないし、トオルにしても、僕よりも貧困ではないという点において、下とも言い切れなかった。僕の生活には、夢も希望もなく、目標もなく、母か僕か、どちらかが死んだら、その瞬間から破たんしてしまうような脆いものだった。

大家の敷地との境界辺りまで進んでみる。大きな二階建ての木造住宅で、庭も広い。振り返るとボロボロのアパート。あんなところに、貧乏人はしがみつくように暮らしているのに、広い庭付きの一戸建てには誰も住んでいない。兄は、命令一つで、遠い異国の地まで、十字軍の遠征のように出かけていってわけもわからず死んだのに、兄に行って来いと命令した人間は「特定秘密」の一言ですべてを言い抜けようとしている。大家のおじさんは、兄には親切だったけれど、僕には別段、優しくもなかった。心筋梗塞で死んだからって、僕は一ミリも悲しくなかった。

土地の境界辺りに茂る膝丈の雑草を蹴りあげる。ちぎれた草の断面から青臭さがふっと香る。嫌なにおいで、僕はもっともっと蹴りあげてやる。足首から先がつりそうなくらい蹴ると、もやもやした気持ちが幾分かすっきりした。そして、なくした、と済まそうとしているボールは、兄の遺品なのだということを思い出した。

母の朝は早い。まだ暗いうちから起き出し、パチンコ店の清掃のバイトに出かける。日中から夜までは、中堅デパートの総菜コーナーで働いている。清掃のバイトは毎日あるわけではないので、月に数回ほど、介護施設の夜勤のバイトもしていた。夜勤一回で一万二千円もらえるので割は良いらしいのだが、体力的にきつい、と最近になって言いだし、ついには辞めてしまった。最近といっても兄が死んでからだ。その分の収入を僕に補えと言いだし、僕は出会い系サイトでサクラをしている。母は、兄が自衛隊に就職しても、兄からは一銭だってお金を受け取らなかった。あんたが将来やりたいことのために貯めておきなさい、と。どんなに辛くてもトリプルワークで働いてきたのは、兄のためだった。僕は月八万円ほどの収入から五万円を母に渡している。残った三万円が僕の元に残る。渡す、といってもテーブルの上に置いておくと、翌日にはなくなっているだけだけど。

僕らは互いに死んだ兄を挟んで暮らしていて、会話もほとんど交わさない。母は昔から兄が自慢で自慢で仕方がなかった。今だって、背中で僕が死ねばよかったのに、と語っている。僕だって、本当はこんなところに居たくない。居たくないけれど、僕が出ていけば母の暮らしは成り立たない。いっそ死ねばいいと思うこともあるが、母が死ねば僕の収入では暮らせない。僕らは静かに深く互いを憎みながら、どうにか生きている。

いつものように事務所に出勤する。季節は春から夏へと進もうとしていた。事務所の中はまったく季節感も何もなく、年中三十度近くの温度をキープしている。狭さと人と排熱で、冷房を入れたところで大して効かないからだ。

『通勤途中に珍しい木を見つけたので、添付しますね(*^_^*)』

こんなメールをトオルに送りつけることが多くなっていた。ポイントを多めに消費する写真付きメールをトオルは躊躇なくチェックし、返信してくる。指定サイトから引っ張ってきた写真だったり、僕が適当に撮った、草木や野良ネコとかそんなどうでもいい写真ばかりを、よくもまあ、と思う。この頃になると、トオルのカモ具合は、結構有名になっていて、初めてチンピラ社員から「おめぇ、いいカモ捕まえたじゃねえかよっ」と肩を叩かれた。引き継ぎノートには『トオルにアドレスを送る。もちろん誤字入りで使い物にならないアドレスで。謝って許してもらう。もう

五回目（笑）』などと、トオルをいかにカモるかを競う内容が増えてきた。僕はノート上では参加していないが、トオルと交わすメールの量は一番多いので、たぶん一番カモっているのは僕だ。

たぶん、トオルが支払った金額は十万とかじゃ効かない額になっているはずだ。僕だって一応人間の部類に入る生き物だ。罪悪感くらいはあるが、トオルに限っては違う。小金持ちの引きこもりの相手をするんだから、これくらいの金をもらってもいいと思っているからか、それほど悪いとも思えなかった。だってそうだろう。引きこもって親の金で出会い系サイトに大金をはたくなんて、はっきりいって勝ち組だ。貧乏人が引きこもったら餓死するだけ。百パーセント落城する、一人籠城戦だ。

この頃では、奈緒のキャラクターもだんだん、オヤジにたかるキャバ嬢みたいになってきていて『実は、死んだ婚約者がプレゼントしてくれたルイ・ヴィトンのバッグがあんまり愛用しすぎて壊れちゃって、とても悲しいんです。同じものを買いたいけれど、あんまり高くて私には買えないんだ(T_T)』という具合に金銭的な会話が多い。トオルは『それは、とても辛いですね。ブランド物のバッグの値段がどれくらいするかわかりませんが、僕だったら奈緒さんにプレゼントしてあげたいです』

『ほんとですか？　その気持ちだけでもうれしいです(*^_^*)。私はお礼においしい食事をふるまっちゃいますね』

『こっちこそ嬉しいです。奈緒さんに会えたらな～』

実際に会うことはないわけだけれど、こんな会話を毎日のように繰り返している。もちろん、これだけじゃない、トオルはメランコリックな気持ちになることも多いらしく『僕の兄は地域でも有名な秀才でした。運動もできて、勉強のほうも学年で一、二を争うほどで、両親は医者にしたがっていました。実際、医大を受験するつもりでした、兄も。でも、リベラルな思想の両親への反発もあったのか、自衛隊に入ってこの国を守りたい、と言いだし、防衛大へ進学し、士官になりました。海外派兵先は、士官としての初仕事でした。僕は、戦争なんてバカらしいし、兄がそんな方向へ行くのは望んでいませんでしたが、兄が防衛大に進んでから、両親の期待が僕の方に向けられ、嬉しかったのを覚えています』と、会話の流れとまったく関係のないメールを送ってくることがある。

そんなとき、僕は不本意にも自分の兄を思ってしまい、トオルへの返信ができなくなる。少なくとも奈緒では返信できない。「僕の兄も自衛官で死にました。シングルマザーの母は、兄が何よりも自慢で、役立たずの僕が生きているのを快く思っていません。君は、今はどうかわからないけれど、両親から期待をかけられたことがあるなんて、ちょっとうらやましいです」という、僕自身の返信メールが

頭の中に浮かんで、どうしようもなくなる。だからそんな日は、トオルへのバイトは終わり。他のカモにメールをすることにしている。トオルと違い、他の連中、トラック運転手やら誰やらは、気兼ねなくメールができるから良い。トオルとのギャップでちょっとはしゃぎ気味の内容になるから、相手も喜んでいると思う。

僕はトオルと普通のメールをしたいのだろうか。同じような境遇を分かち合いたいと思っているのだろうか。

兄のグローブを使って壁当てをしていると、こんなことが頭の中をぐるぐるする。いや、こんなことが頭の中をぐるぐるするから、壁当てをしている。僕の頭の中で、いつまでも兄のことがすっきりしないのは、兄のことを整理できていないからかもしれない。僕は、そんな風に考えるのが苦手なのかもしれない。誰かに話して、それで考えが整理されるのかもしれない。トオルという似たような境遇の人間が現れて、そのことを話して整理したいという欲求がどんどん強くなっているのかもしれない。でも、たとえば僕がいろいろ嘘はついていても本当は女だったら、トオルと会って話しくらいはできるかもしれないけれど、男の僕が、引きこもりのデブにどうやって会うというのだろうか。

僕くらいの腕力じゃ、どんなに力いっぱい壁にボールを投げつけても、大した勢いでは返ってこない。もっとばんばん投げて、拾って投げてを繰り返したい。ボールはころころと情けない惰性を繰り返すばかり。そして力み過ぎてすっぽ抜けた。あんなところに二度も当てる方が難しいというてっぺん付近の角っこに当たり、また大家の鬱そうとする一方の庭に飛んでいった。

死んだ大家の死んだような家と庭に、死んだ兄の持ち物は引きつけられるのか。これで二個目だった。

出勤するとチンピラ社員に呼ばれた。初めて入る部屋だった。デスクが二つと応接ソファが一組ある。奥に窓が一つあるが、汚いブラインドが下ろされていて、薄暗い。入る前からタバコ臭かったが、入ったらもうタバコの臭いで咳き込むほどだった。ソファで一人、デスクで一人、それぞれ何をするわけでもなく、ただタバコを吸うのが仕事のようにせっせとふかし、申し訳程度にスマホをいじっている。チンピラ社員がソファのチンピラ社員に声をかけて移動させると、僕にすすめた。座るなり「おめえの担当するカモのことだけどよお」と話しだした。

まったくまともな話ではなかった。簡単に言うと、オレオレ詐欺の受け子みたいなことをしろ、というのだった。断われる雰囲気というか、そもそも選択肢を提示されていなかった。

「簡単なことだからよ。事務局用メールの送り方を教えて

やるから……それで受け取りにいくだけだよ……簡単だろ……もちろんボーナスは弾むからよ、よろしく頼むわ」

こんな感じで一方的に頼まれた。僕は別にグレたこともなければ、不良の友だちがいたわけでもないし、お遊び程度の万引きすらしたことがない。だから、犯罪的な匂いのする、いや、いまの出会い系サクラだって犯罪的なモノな気がするが、それよりももっと危ない匂いのすることを引き受けることになって、胸の中が激しく騒いでいた。

席についてパソコンを起動させると、隣の金髪頭に左耳だけバカみたいにピアスをしている男がチラチラと話したそうに視線を送ってきたけれど、無視した。

チンピラ社員の言われたとおり、まずはトオルにサイト事務局を名乗るメールを送った。

『当サイトをいつもご利用くださり誠にありがとうございます。中村トオル様には、特別に、当サイトの最上級会員ランク、ゴールデンプラチナ会員への無条件での昇格を承認させていただきました。別途費用などは発生しませんのでご安心ください。ところでゴールデンプラチナ会員様には、特別な特典がございます。一般女性会員様と、より信頼関係を築くことができるプレゼント機能というものがございます。これはゴールデンプラチナ会員様のみにしかお知らせしない特別機能でございますが、こちらを使えば、意中の女性会員様に実際にプレゼントを贈ることができます。ご利用の際には、事務局まで別途ご連絡ください。その際に、プレゼントを贈る相手と渡す日を明記してください。安全面と確実性の面から、ご自宅まで事務局員が受け取りにまいります。事務局員の来訪してほしい日時もあわせて明記してください。よろしくお願いいたします』

つまり、女性会員として高級ブランド品をねだり、それを会わずにプレゼントする仕組みを提示。贈られたプレゼントは、チンピラ社員曰く「知りあいに販売業者がいっからよぉ、怪しまれずにさばけっから」ということだった。転売したブランド品の売上の一部を、僕ももらえる、ということだった。会ったこともない、いるかもわからない恋人候補のメール相手に、ブランド品を贈りたがるなんて、僕には理解できない。そんなに単純な男がいるのかと思ってしまうが、事務局メールを送って一時間もしないうちに、トオルから『ゴールデンプラチナ会員特典を行使したい』というメールが返ってきた。

なんとなく落ち着かない気持ちのままバイトが終わった。途中、様子を見に来たチンピラ社員に結果を話すと「おう。なるべく高いモンをねだっとけよ」と満面の笑みを見せられた。真っ黄色なきったない歯を剥いて。

帰ろうと事務所を出たところで、バイトの同僚と思われる、金髪頭の左耳にやっためたらとピアスをしている男に「社員に呼ばれてたろ」と話しかけられた。「社員」のイ

ントネーションが語尾上がりの独特な言い方で。

なんでそんなことを知っているのか警戒して「あ、うん」とそっけない僕にお構いなしに続ける。

「あれだろ、あんたのカモの仕上げについてだろ。俺も前に同じようなカモを見つけて、やったことあんだよ」と続ける。僕は思わず「どんなでしたか?」と聞き返してしまった。

二人で近くのドトールに入った。金髪ピアスは意外にも禁煙席に入っていった。僕はコーヒーなんてまったく飲まないし、それどころか紅茶も飲まないけれど、ジュースなんて頼んだら子どもみたいだから、一番安いアメリカンコーヒーのSサイズを注文。金髪ピアスは、同じサイズのブレンドだった。

「それで、どうなったんですか? そのカモは」

金髪ピアスはニヤニヤしながら「まぁー、めちゃくちゃになったみたい。なんかよ、うちのバイト先、裏でちょっとやばい人たちとつながってるみたいでさ。ま、見りゃわかるじゃん、あんな社員、まともじゃないっしょ」

僕から言わせれば、あんただって十分まともじゃないけれど。

「最初は、ただプレゼントをねだって贈ってもらって、お礼に百均で買ったちゃちなハンカチとかを贈り返すというくらい。もちろん、こっちがもらうのはブランド品になるように、ねちねちねだるのが大事なんだけどよ」

金髪ピアスは、持ってきたスティックシュガーを十本くらい投入して、ミルクも三つ入れて混ぜて、一口飲んで苦い顔をした。こいつも本当はジュースしか飲まない人間なのかもしれない。

「それでよ、ブランド品を贈らせるのと同時に、サラ金やヤミ金のチラシやメールをがんがん送り付けるんだよ。それももちろん、この会社の仲間がよ。俺のときは、五回くらいブランド品のバッグとかネックレスとか贈らせたかな」金髪ピアスは、身を乗り出し「こっからがすげぇんだよ。まじで。テレビのドッキリみたいでさ。プレゼントを五回くらい贈らせたらよ、女と会わせるんだよ。プロフィール写真の女と。ちょっとやばい人たちの関連事業の風俗嬢らしいんだけど。そうなると、俺たちの仕事はもう終わりになっちまうんだけどよ。でもさ、本番はこっからなんだよ。女と会う前から貢いでいるような男が実際の女と会ったらどうなるか、もう止まらないわけよ。プレゼントを贈っているときから借金しているような奴もいるけど、女と会うと借金のスピードが上がるわけ。ねだる物もエスカレートすっからさ。借りる先は、やばい人たちの関連金融業者だから、これも相当やばい。雪だるま式に借金は増えて、骨の髄までしゃぶりつくされて、女は消えて、最後は……」

「最後は？」

「いや、俺も最後は知らない。死ぬまで原発作業員とか治験とか、死ぬほどきつい仕事を転々とさせられ、最後は臓器売買されるとか、そんな話も聞くけど、実際は知らない。ま、なんにせよ地獄をみることになるのは確かみたいだ。ま、女が出てきたところで、俺たちの出番はなくなるからうま味はなくなるんだけどさ」

人一人の人生が終わってしまうことをうま味と表現してしまえるようになったら、もう人間とはいえないのではないか。僕はまだ、そう思える違和感を持っているから、踏みとどまっているのかもしれない。でも、このまま進めば、わからない。見た目通りの軽薄さと人間味のなさに少しの違和感も持っていないような目の前の金髪ピアスの生き方は、それはそれで楽なのかもしれないけれど。

引きこもりのデブとはいえ、親が医者なら金ならうなるほどあるのだろう。大体、金持ちの医者なんて、悪いことをしているに決まってる。どうせ製薬会社とか、なんだか怪しげな連中とグルになって、患者に薬をジャンジャン出して金を稼ぐことに熱心な連中に決まってる。そんで溜め込んだ金は、どっかの政治家に貢いで利益誘導してもらうんだろ。どうせ。高い場所で金を回しあってるだけのその金を、貧乏人のところまで引っ張ってくるだけだ。いいだろう、貧乏人がそのおこぼれのおこぼれの、さらにおこぼれをもらったって。並の金持ちなら簡単に破滅などしないだろうし。大体、金持ちの医者なんて、製薬会社なんかとグルになって、患者に薬をじゃんじゃん出して、金を稼ぐような悪人ばっかだろうし。お互いの少ない身を貪りながら生き続ける僕と母のほうがはるかに破滅に近い。金持ちは普段から貧乏人や無知な人間をだまくらかして稼いでいるんだ。これは貧乏人が一矢報いるささやかな一揆だ。金がうなるほど余って仕方ないなら、少しくらいよこせばいいんだよ。

金髪ピアスと別れて家に帰る頃には、トオルに対する僕の仕打ちを擁護する声で、頭の中はいっぱいだった。

教えられたトオルの住所は、意外にも僕の家から二駅ほどの場所という近さだった。事務所から半径二百キロ圏内くらいなら、カモを発掘した担当バイトがプレゼントの回収に行くことになっていた。それも一人で。万が一の時は、トカゲの尻尾みたいに切られるためだと思う。

親が医者とかいうトオルの家だから、かなり大きいと思っていたが拍子抜けだった。そもそも、住宅街からして、貧乏臭い、平屋交じりの木造住宅だらけで、明らかに昔の、古臭い住宅街だった。トオルの家はどう見ても、敷地十五坪ほどにめいっぱい建てられた古い木造住宅だった。今のデザインじゃないのが一目でわかるし、壁も屋根も軒もボロボロで、敷地には駐車場もなかった。周囲の黒い柵は錆びて表面がはがれ、所々穴が空いていて巨大なハムスターが乱雑にかじりまわったみたいだった。

表札はちゃんと「中村」となっていた。あまり見ない家族全員の名前が入ったものだ。「中村道夫」とあり、その下に「夕子」「幸一」「透」と続いていた。こんなボロ家に家族が四人も住んでいることをつまびらかにされても、訪問者がただ気まずくなるだけなのに、気づかないのだろうか。

インターホンも最近では見かけない、ただ押すボタンだけのついたもので、押すとジリリリッ、と耳障りな音が中のほうで響いた。焦って二階から降りてくるのがまるわかりな、ドタドタする音が外まで聞こえた。玄関の引き戸をガラガラ開けて、僕と同年代くらいの、思ったより普通の男が出てきた。上下、色落ちしかけた藍色のスウェットで、髪はぼさぼさ、体型はデブではなく、ぽっちゃりでもなかった。青白い顔で、ヒゲもなし、日本人らしい団子鼻、厚ぼったい一重と、普通よりやや不細工くらいの顔立ちで、会った瞬間忘れる顔だった。

「こんにちは、あの、MKエンタープライズ（チンピラ社員から名乗れと言われた、おそらく架空会社）と申しますが、トオルさんでいらっしゃいますか？」

困ったような人の良さそうな愛想笑いを浮かべた。トオルは「はい、そうですけど、すいません」といきなり謝った。何がすいませんなのか。金持ちの医者ではない、ということだろうか。この家に住んでいて金持ちの医者なら、相当の変わり者だ。「ちょっとプレゼントを買うのが間に合わなくて……」

たぶんゴムがゆるいのだろう。スウェットパンツの両端をつまんだ両手には、それ以外なにも握られていない。

「わざわざ来てくれたのに、すいません」と何度も頭を下げる。僕の頭の中で、チンピラ社員に怒られるんだろうな、という考えと、トオルの踏みとどまったことに対する安堵が入り混じる。いや、踏みとどまっているのは僕か。本当のところ、トオルに色々聞いてみたかった。親は本当に金持ちの医者なのか、兄は本当に戦死したのか。それだけでも知りたかった。でも、これを聞けるのは「奈緒」だけだ。ただの「事務局員」の僕が知っていていい情報ではない。

「わ……かりました。ではまた後日、事務局を通してご連絡ください」

きっと土壇場で怖くなったのかもしれない。こんなぼろい家に住んでいるんだ。こつこつポイントくらいは消費できるが、ヴィトンのバッグなんて買えないし、やめたのだろう。たぶん、医者というのは嘘だろう。では、兄の戦死も嘘なのだろうか。

踵を返すとトオルが「あの」と呼びとめてきた。

「あの……、こんなこと聞いたら怒られるかもしれないんですけど、その……、奈緒さんって……本当にいるんですか？」

素足でつっかけた汚いサンダルを見ていた僕は顔を上げた。トオルの厚ぼったい一重が正面から僕の目を見据えている。いやすがっている。いると言ってほしいみたいに。いると言えば、トオルはサイトを続けて、今度こそヴィトンのバッグを贈るかもしれない。彼が決断をする前に、サラ金やヤミ金のダイレクトメールがじゃんじゃん届くだろう。金は手に入る。引き返せない道を行くことになるとも知らずに。いないと言えば、やっぱり、となるかもしれない。そしてまたほかの出会い系サイトに戻るか、あのサイトで別のサクラに騙されるかだろう。どっちにしても、彼には選択肢なんてない気がする。クモの巣にからめとられた羽虫が、生きるための可能性を探るのに等しい。なんて答えればいいのだろうか。

上空を自衛隊の戦闘機が爆音を響かせて飛んでいった。トオルは、ふっと上空を追った。僕も安堵して、視線を上げた。この時期は航空ショーが近く、よくバカみたいな音を響かせて飛んでいる。ぼそりとトオルがつぶやいた「兄もパイロットだったんですよ……」

僕の頭は、何か重いモノで殴りつけられたように、一瞬衝撃を受けて、視界が揺れた。

「僕も……」かすれ声は声にならなかった。きっと、僕はこの言葉を待っていたんだ。「奈緒」にではなく、「僕」に向けられたこの言葉を。

「僕の兄も……」

カラカラに乾いた口内で言葉はうまく発せられない。でも僕は言いたかった「僕の兄も……」

トオルの視線が僕に戻ってくる。

「自衛隊にいました。でも……殺されました。中東のどこかで」

トオルの厚ぼったい瞳が大きくなる。サンダルが砂利をする音がした。

「僕の兄も、です。輸送機の操縦中に撃墜されたって、父が……」

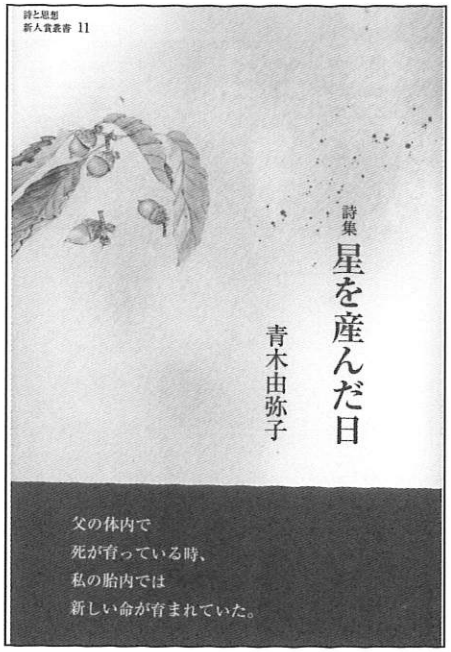
きっとトオルは、こんなぼろい家の中で鬱々としながら、それでも誰かを求めてネットの世界をさまよっていたのかもしれない。僕は、話したいと思った。それからサクラサイトのことを謝りたいと思った。

もし、彼が許してくれたら、あの廃墟の大家の家からボールを拾ってこよう。二つのボールを。

（「星灯」3号より転載）

たいらい　さとし

1979年　千葉県生まれ
千葉県立松戸馬橋高校卒業
2017年　第14回民主文学新人賞佳作
現在、埼玉県在住
自営業



土曜美術社　2000円＋税

1600円（税込／送料共）
ブイツーソリューション
御注文はアジア文化社まで

星灯

東京都

『星火燎原』

小林多喜二と太宰治の統一をめざす

「闇があるから光がある」

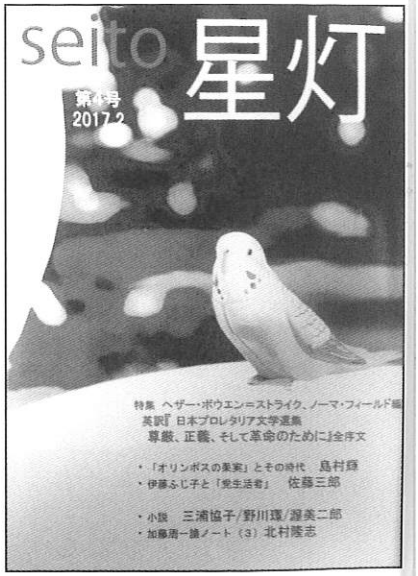
創刊は二〇一四年十一月、これまでに四号を発行した。それぞれにささやかな文学活動をしてきた三人が、あの「蟹工船」ブームの中で知り合い、何か面白い雑誌をつくろうじゃないかと意気投合した。あまり先の見通しもなく、とりあえず船出したのが「星灯」である。

「闇があるから光がある」

「創刊の辞」では、小林多喜二が恋人タキに書き送ったこの言葉を冒頭に掲げた。めざす文学は、小林多喜二と太宰治の統一。理想をめざす「熱い心」と、現実に傷ついた「冷めた目」の共存である。

「星灯」のタイトルは、中国の古典『書経』のことば「星火燎原」からとった。書家である同人のひとりの発案である。夜空の星のような小さな火が、いつか広い草原を焼き尽くすこともあるという意味である。小さな本誌がいつか日本の文学シーンを変える、そんな見果てぬ夢をこめた。

また別の同人は「星灯」という言葉から、「星の王子様」の「点灯夫」を思いうかべた。



——星から星へ旅する王子が五番目に訪れたのは、わずか二分で自転してしまう小さな星。外灯が一つだけあり、点灯夫が夜になると灯を点し、朝になると灯を消している。「この点灯夫の仕事には意味がある、夜空の星のひとつをキラキラさせて、夢をつくりだしている仕事」と王子が感心する。

点灯夫は、夜空の無数の星の中のたった一つの星の灯を点し続ける。その小さな星が誰かにとってかけがえのない星となり、夢となる——

「星灯」にはそんな思いも込められている。

能書きばかり多くて恐縮である。しかし、頭でっかちで言うことは一人前のくせに、実体はたいしたことないのである。同人はたった三人だし、居住地も仕事もバラバラ。

実は編集会議も合評会もしていない。これまでに三人全員が顔を合わせたのは、三、四回しかない。打ち合わせ、意見交換はほとんどフェイスブックのグループですませている。興味のある方は「星灯のひろば」というグループを検索してください。誰でも見られます。

発行には、その都度、これぞと見込んだ書き手に原稿を頼んでいる。創刊号には「船に乗れ！」の藤谷治インタビュー、第三号（夏目漱石没後百年特集）には、小森陽一氏の講演を掲載した。第四号には、ノーマ・フィールドさんが編纂し昨年米国で発行した『英語版・日本プロレタリア文学選集』の、ノーマさんと共編者の手になる序文と各章の解説全文を邦訳した。日本プロレタリア文学に対するアメリカでの関心のありかを示すユニークな評論である。

ほかにも同人のつてを頼んで、これまで十四人に評論、小説を寄稿してもらっている。「星灯」の大事な同伴者、サポーターである。

原稿料は出ない代わり分担金もとっていない。それで一号につき一三〇～一六〇頁、五百部を刷っている。この発行費用を三人の同人で負担したら大変である。だが、今のところ収支はとんとんである。贈呈・送付している人たちが、貴重な誌代・カンパを送ってくれるおかげである。読者（奇特な人たち?）に支えられて、何とか続けている。

（北村隆志）

星灯同人の二人（前列の左右端）と寄稿者たち。来日したノーマ・フィールド・シカゴ大学名誉教授（前列左から２人目）を囲んで＝2016年２月17日、東京・池袋

星灯
〒182-0035 東京都調布市上石原 3-54-3-210
Mail: kitamura@c.email.ne.jp